月刊ナイトバグ　投稿心霊ツアー型リグルのマガジン
NIGHTBUG
2009年8月号
リグルに襲われるのか、リグルが襲われるのか
それが問題だ。
夏休み！海だ！山だ！
「ホラー特集」
本当に裂けてきてるよ！
人間以外まで混じっていたのだ
腹から何か聞こえる
いあいいあ　いあ

月刊ナイトバグ　2009年8月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

ミドリノハネ
角衛門 秋水
まだ、私がちっぽけな蛍だった頃

気がつけば一人ぼっち
さみしくて、くるしくて
ただ光を求めていたんだ
みんなどこへ行ったの
ぷか
ぷか
パチ
ここはどこだろう
天国？

体が軽い
あれ??
羽がない
どうしよう
どこへ行ったの
それは私の羽?
違うわ違う。
あなたの羽は
子供の澄んだ瞳色
この羽私の?
違うよ違う。
あんたの羽は
枯れ葉一枚より脆い

羽…
はね？
はねがないのにとんでる？
あたりまえじゃない
どうやって？？
とびたいと思うからとぶのよ
手

ひぇぇ〜
とべるっ
あれ？
あたりと前じゃない
ここは幻想郷よ
幻想郷？
あるものがなくなって
ないものがある場所よ
あなたは
何を探しに来たの？
私の探しているもの？

あるものがなくなって
ないものが見つかる場所

ほたるこい　最終話

著者：はね～～

そして私は、ただ時間だけ無駄に使ってひかりと一緒に戻ってきた。

ちょっと大き目の石を枕代わりにしてから、私はひかりを寝かせる。ここまで戻って来るまでの間に、私が呼びかけても……ひかりはほとんど反応をしなくなった。

呼吸も完全にばらばらな中、何とか息をしようと苦しげに何度も胸を上下させてるひかりの姿は、もう側で見ているだけで辛い。

「ひかり水だよ。口開けて……」

もう自分じゃ水を汲めないのは聞くまでもないから、私は手で掬ってから一気に入らないようゆっくりとひかりの口に移していく。

「……おいしい」

胸を押さえながら小さく笑うひかりの顔が本当に痛々しかった。でも私も笑い返す。

「良かった。もうちょっといるなら言ってよ」

「ううん。リグル……お水って、本当に……あまいんだね」

「はは。それが分かればひかりも、蛍になる、才能、あるかもよ?」

詰まりながらだったけれど、そうやって軽く茶化せたのは私にしては信じられないほど上出来だったんじゃないだろうか。

そんな中で、ひかりは横になったまま口を開いた。

「ほーたる……こい、あっちのみずは……にがいぞー、こっちの……み、ずは……あーまいぞ……」

ほとんど喘いでるように聞こえるひかりの歌声は、私が何度も聞いた歌だ。

もう歌詞だって覚えた。

「ちっちゃなちょうちん、さげてこい……星の数ほど、とんでこい……。２番はこれで合ってたっけ、ひかり?」

「うん……あってるよ……」

必死に歌うひかりの歌声は、もう寿命が迫った中でかすかに点滅する蛍の光そっくりに私には見えて。

歌なんか歌わないで黙って横になってて、という私の言葉はどこかに流れて消えた。

「……ねえひかり。何か私にして欲しいこと、できることない……?」

そうだよ止めたってもう意味なんかない。ならひかりのやりたい事、望むことを少しでも叶えてあげたかった。

だけどひかりから返事が来ない。目を閉じてうつむいたまま、身動きもしてない。……ちょっと嘘でしょ!?

「ひかり? ねえ、ひかり!」

「…………あ」

弾かれるように私はひかりの肩を強く揺すった。多分ほんの数秒の事だったと思うけど、私にはそれが物凄く長く感じた気がする。

だから……目を開けてくれた時は、本当にほっとした。

「まだ寝る時間には早いよ、ひかり。ね、私に何かして欲しい事とかない?」

手を強く握って、私はひかりが側から離れ

ていかないように祈りながら話しかける。
　すぐ側にいないと聞こえない小さな声で、ひかりはそっと呟いた。
「…………ほたるが、みたい……な」

　あ……。
　そうだよ、ひかりがこの状況で私に頼む事って……これしかないじゃないか。
「分かった。ちょっと待ってて、ひかり……」
　けれど私は知ってる。蛍のみんなが出てくるには、あと十日は必要だって事を。
　でもひかりの体力は十日どころか、もう今夜だって持つかどうかだ。
　私は咄嗟に土の中に埋まってる幼虫達に命令をしようと思って……でもできなかった。
　土の中に何年もいてやっと出てこられる時期が来るのに、今無理矢理出てこさせたら絶対にみんなの寿命は大幅に縮むんだ。只でさえ成虫になってからは長生きできないのに。
　他の蟲ならともかく、蛍だったら私が命令すればそりゃあみんな従うよ、そんなのは知ってる。でも……ううん……だからこそ、そんな事はやっちゃ駄目なんだ。
　だけど……一度思い留まった後、私はひかりを見た。最初は分からなかったけど、素直で歌と蛍とお母さんが大好きな、本当は凄く寂しがり屋の女の子。
　ひかりの間違いなく最後の頼み事を無下になんかできるわけない。私の我が侭だけど私がそんなことしたくないんだ、悪いかよ！！
　そして悩んで出てきた私の結論は。
『お願い……今何とか出てこられそうな子達だけで良いから、聞いて欲しいんだ。ここにいるみんなは知ってると思うけど私の友達、ひかりの為に蛍を見せてあげたい、今すぐ。でも、今無理したら命を縮めるのは私だって分かってる。だから……ひかりに自分の姿を見せてあげたいって子だけで良いから。出てきて……！』
　蛍は人間を喜ばせる為に飛んでるんじゃない。
　こんなのは無意味なお願いだってのは分かってるけど、私はそれでも目を閉じて呼びかけた。ほんの少し位は、ひかりの為に命を削って出てきてくれる蛍がいるって信じて。
　でも目を開けるのが怖い。何分も私は目を開けられなかった。
　だって、誰も出てこなくたって全然不思議じゃない……いや、普通に考えたら誰も出てこなくて当然なんだ。
　だけどその時はしょうがない。私だって光ろうと思えば光れるんだし、ひかりには私を見て貰うっきゃないよな……。
　そう決めて私が目を開けた時。

　目を閉じてる間に川の周りの時間が誰かの仕業で十日間進んでいたんじゃないかとさえ、私は思ったくらいだ。

　私が命令した訳でもないのに、ほとんどの蛍が出てきて月明かりの必要も無いくらいの光で周りを照らしていた。
「……信じらんないよ人間の為なんかで。こんなに早く出てきてお嫁さんや旦那さん見つける時間なくなっても知らないぞ」
　驚くを通り越して流石に私も呆れた。少しは変わり者の蛍がいるんじゃないかと期待してたけど、揃いも揃って無計画にも程があるでしょこれは。
　けれどそんな私に対して、蛍のみんなはへっちゃらだと言わんばかりに元気に飛び回っている。あーあーあ、みんな揃ってバカしかいないね。私の頭が悪い訳だ。
　でも……ありがとうみんな。
　声には出さなかったけど、本当は泣き出したい位に嬉しかった。だから私もひかりの気持ちに答えよう。
　蛍以外には一切見せて来なかったし、人間には一生見せるつもり無かったけれど……ひかりになら私の輝く姿を見て欲しかったから。

「ひかり。起きてひかり」
「…………ん……リグ、ル」
　苦しそうに動く胸をさすりながら私が呼びかけると、ひかりは少ししてから小さく薄目を開けた。
「見てごらん。みんなひかりの為に出てきたんだよ」
　そして私がそっと呼びかけると、ひかりの

周りをオレンジ色の光の絨毯が包むみたいに広がっていく。

「わぁ……きれい……」

その時みたひかりの幸せな顔を、私は絶対に忘れないだろう。それは今までで一番素敵な笑顔だったから。ひかりは震える手を空に伸ばして、蛍を掴もうとする。

でもちょっと届かない……と思ったら一匹が、自分からスッと手の中に入っていった。

「ひかってる……。あ、リグルも……」

ひかりの台詞に私は思わず笑った。

「あはは。ひかりが光ってるって言ったら、どっちの事か分かんないよ」

多分気が付いてないんだろうけど、蛍に包まれるように真ん中にいるもんだから、ひかりも私から見たら光ってるように見えるんだ。

「リグル……」

「え、なに？」

少し離れただけで聞き取れなくなるほどか細くなったひかりのすぐ側まで寄って、私は顔を近づける。

「わたしも、ちゃんと、ひかってた……かな」

そのひかりの言葉は私にとって、ゼロ距離から撃ち抜かれたぐらいの衝撃があった。

「大丈夫だよ。……ひかりが光れないわけ、ない……！　じゃんか……！」

話す途中で私は言葉が詰まってしゃくりあげる。

絶対に泣かないって決めたのに……この……私の根性なし……!!

だけど一度零れるともうダメだった。ぼろぼろ涙が溢れて止まらない。

「でも、ほんとは……もうちょっと……ひかってたかったな……」

「大丈夫だよ……。今度……生まれた時は……きっと今の分も纏めて私なんか目じゃないぐらい、眩しく輝ける……からさ」

私は目一杯光りながら、思いっきりひかりを抱きしめた。無理だと分かっていても自分が光る事で、ひかりが消えないように祈って。

「……あり、がとう……」

だけど、ひかりの言葉はどんどん減って行って。

私が呼びかけても、ほとんど返事が返って来なくなって。

「ひかり……？」

「リグル……また……会えた、ら。……あそ……ぼ…………ぅ」

目を閉じたまま、最後にそう言った後。

私が何度呼びかけても、それっきりひかりはもう目を開けなかった。

それから火みたいに熱かったひかりの体の熱が、すーっと引いていくのを私が感じた時、私にも分かった。

ひかりはもう遠くに行ったんだって。

「うん。そうだね、遊ぼう」

返事はなかったけれど、ひかりは幸せそうに笑っていた。

それからひかりをどうするか……少し悩んで。私は川に流すことにした。

このままにしていたら絶対に他の妖怪が食べちゃう。でもこんな寂しい場所に埋めるとかは考えたくない。

最後にさらさらの白い髪を撫でてから、そっと水に浮かべると、ゆっくりした川の流れに乗ってひかりが離れて行く。

「……お母さんに会えると良いね、ひかり」

さよならの代わりに、私は最後にそう声をかける。

人間も蟲も妖怪も、死んだら三途の川を通って閻魔の所に行くらしい。どれだけ遠い所は私も知らない。

ただ川の先はどこまでもずっと、蛍のぼんやりした淡い光が続いていて。

まるで、ひかりが迷ったりしないように、皆が道の先を照らしてるように私は思った。

私に出来る事はあとなんだろう。

頭の良くない私が考えて出てきたのは1個だけ……ひかりの大好きだったあの歌を歌いながら見送ってあげるぐらいだった。

「ほーほー、ほーたるこい。あっちの水は……苦いぞ……」

あれ……おっかしいな。

空から見下ろしてるひかりの姿が、ぼやけてよく見えないや。

「こっちの、水は……しょっぱいなぁ…………」

そこから先は、もう歌声にならなくて。
結局それ以上……私はほとんど碌に歌えなかった。

＊＊＊＊＊

「そんな事があったんだ。ほい、蒲焼き出来たよー」
話を終えた私の前に皿が置かれる。お金ないけどこんなに食べても良いのかしらん？
まあいいや。
「それにしても……はむはむはむ……ずいぶん淡白な反応だなぁ。まあ分かっちゃいたけどさ」
人間の生き死にを一々気にする妖怪なんか普通いない。
私たちより早く死ぬのはあたりまえだし、基本的に人間は私たちのご飯だもの。気にしてたら食べてらんない。ミスティアの反応は当然っちゃ当然だ。
だけど。
蛍が見たいと言った女の子の姿を、私は何故か今でも良く覚えていた。
「だってねぇ。私達妖怪から見れば人間も蛍みたいなもんじゃない？　蛍二十日に蝉三日、十日の菊に六日の菖蒲ってね。……おめでとうリグル、蛍が一位よ！」
「はいはい」
「うわリグルに無視されたよ、蟲だけに⁉」
お猪口を傾けながら、私は一つ大きく息をついた。
あの日、私と一緒にひかりを見送った蛍のみんなも、とっくのとうに誰もいない。
こうやって柄にも無く昔の事を考えると、つい思っちゃう事がある。妖怪は長生きなのが当たり前だけど、それが単純に良い事なのかどうか……って。
いや、寿命が違うのは分かってんだけどさ……。何ていうんだろ、こういう時にスパッと合う言葉が浮かばない自分がちょっと悲しい。
手持ち無沙汰に空になった徳利をくるくると指で回してると、それを取り上げて新しい徳利を置きながらミスティアが口を開いた。
「寂しいんじゃないの？　私は元から一匹狼……じゃなくて一匹妖怪だから良く分かんないけど、リグルは違うからねー」
そして返ってきた何気ない一言は。
私にとって思いっきり図星だった。
「別に……寂しい訳じゃないけどさ」
でもそれを素直に認めるのは何だかとっても恥ずかしい気がして、私は出されたばかりの徳利を一気にらっぱ飲みする。中身は只の水だけどさ。
「でも50年以上も昔の話なんでしょ、それ。人間だったらいい加減、別の誰かに生まれ変わってるかもよ？　前世の記憶とか何かで『生まれる前から愛してました！』みたいなメロンチックな恋愛に発展したりして」
「ぶーっ‼」
そんな時、トンデモな事を唐突に言われて私は思いっきり吹いた。
丁度えいやっと空を見上げて飲み干したタイミングだったからたまんない。吹き出した水はミスティアじゃなくて全部私の顔にかかった。……うぇぇえぇぇ……。
「また派手に吹いたわねー。こっち向いてる時じゃなくて良かった良かった」
うっわ、しかも確信犯だよ。
「……あのさミスティア。突っ込み所が多すぎて私、どこから突っ込んだら良いか分かんないんだけど」
「一番最初は優しくキスからって聞くけど？」
「だから何の話さ⁉」
仮に生まれ変わってたとしても人間とは限らないだろうし。
昔の記憶なんか普通は覚えてないと思うし、そもそも私は女だって。
……つーかメロンチックって何よ。
ちょっとしんみりした雰囲気はもう遥か彼方に吹っ飛んじゃって、ミスティアと騒いでいたそんな時だった。
「おーやってるやってる。ほれアリス、言った通りだろ屋台があるって。とりあえず店主、適当に出してくれ。どうせ勘定はこいつ

持ちだぜ」

「私はただ見に来ただけよ、全部魔理沙が自分で払え……って、あら。いつぞやの満月騒ぎの時の蛍もいるわね」

「うわぁああ⁉」

　ミスティアとのバカ話のせいで、周りの足音とか全っ然気にしてなかった私も悪いけど、ふと気がついたら幻想郷でもかなり物騒なコンビが私の側にいた。

　やたらと夜が長かった時、いきなりやって来て私を撃ち落していなくなった、黒くて派手な人間とカラフルで派手な元人間。

　ボッコボコにされた仕返しができる程度の相手なら『ここで会ったが百年目よ、勝負だ勝負！』って、チルノよろしく喧嘩吹っかけたい所だけど……。

「ありゃ本当だ、そういや今年もそろそろ蛍の季節だもんな」

　黒い人間がこっちをチラッと見るだけで、そんな気は綺麗に吹っ飛びました、はい。

　へたれって言うなー！

「じゃ、じゃあ私はこれで帰るよミスティア。そんじゃまたー」

　変に絡まれたくないし、蛍の幼虫を見て回りたいのもある。

　そそくさとその場を離れたがった気持ちがわかったのか、カラフル魔女の方が私を見て苦笑していた。

　さて……逃げよっと……。

　と思った時、急に私の腕を黒い方に掴まれた。

「待て待て、私達が来たぐらいで急に逃げるなよな。前から聞きたかったんだけど、お前は光んないのか？　尻とか出して光りながら飛んでそうなイメージあるんだが」

「何その変なイメージ⁉　私は変態かっての！　……一応光ろうと思えば光るけど、人間には見せてやんないよ」

　アレは結構疲れるし、闇雲にただ光ってるだけじゃない。

　人間に見せてあげた事があるのは、後にも先にもひかりだけだ。少なくともこいつに見せてやろうとは絶っっっ対に思わない。

「ちぇ、随分とケチだな。でもいいよ今年も蛍狩のシーズンか、腕が鳴るぜ」

「蛍狩って蛍を捕まえる事であって、やっつける事じゃないわよ魔理沙？」

「どこかで聞いたような台詞だな。蛍狩り名人の私にその問いは愚問だぜアリス。まあ、たまーに勢い余って潰しちまう事もあるけど」

「ちょっとぉ！　何てことしてんのさ⁉」

　とんでもない事をさらっと言われて、私は思わず目を剥いて回れ右する。

　一寸の虫にも五分の魂なんだぞ！　そりゃ確かに小さいけどさ！

「まあそんな訳で今年も楽しみにしてるぜ、お前も飛んでたらついでに狩ってやるよ」

「どう見ても大迷惑です、本当にありがとうございました……ってみんなに変わって代弁しとくよ。でも、あんたみたいに目にうるさい強烈な光ばっかり出してる人間に、蛍の光の良さが分かるとは思えないんだけど」

　マスターなんちゃらって、目にも体にも痛いスペルカードに焼かれそうになったこちらとしては不思議でしょうがない。

　蛍の淡い光とは比べるべくもないし、あんな強い光を側で出されたらみんなびっくりして逃げ出すから熱烈にやめて欲しいんだけど。

「酷い言われようだな。私は一晩中見てたって飽きないぜ？」

「……へぇ。で、その心は？」

　どうせ変な返しが帰ってくるだけだと思いながらも、折角なんで一応は聞いてみる。

　でも意外なことに、ツートンカラーの魔法使いは事も無げに。

「だって綺麗だろ？」

　多分何の他意も無いんだろう、素直な目をしてそう言う。

『だって……きれいだよ？』

　何故かその時ひかりと、天下御免の暴走魔法使いの顔がほんの一瞬だけ重なった。もう見てて清々しいくらいに、全く似ても似つかないはずなのに。

『今度生まれた時はきっと、今の分も纏めて輝けるよ』

　そして自分の台詞も思い出す。

まさか……ねぇ。
もしそうだったら、それこそロマンティックも何もあったもんじゃないや。
思わずマジマジと目の前の黒い人間の顔を見た後、妙におかしくなって私はつい吹き出していた。
「なんだよ、いきなり人の顔見て笑うなよな。それとも私の顔に何かついてるか？」
「別にー」
思慮とか分別とか、欠けてる物なら色々あると思うけど……とは思ったけど言わない。
どうせ痛い目見るだけだし。主に私が。
「みんなは人間の目を楽しませる為に飛んでるんじゃないけど、見るだけなら只だからね。邪魔しない程度になら幾らでも見てってよ、綺麗って言われたらみんなも悪い気しないし」
もちろん私も悪い気はしない。
私だって綺麗なお姉さんとか言われたら、その場で三回転くらいして愛嬌の一つも振りまきたくなるし。……当然、言われた事は皆無だけど。
「ああ、一応言っとくけどお前じゃなくて蛍の話な？」
けれど私のそんな妄想を、にやにやと嫌らしい笑みを浮かべた黒白が見事にぶち壊した。
「失礼だな！　私だって蛍でしょ、どっからどう見ても」
「えーっと。私は最初あんたを見かけた時はゴキブリか何かと思ったけど……」
「真顔で言わないでよ!!」
でも、横にいたカラフル魔女の素の突っ込みの方が効いた。凄く仲が悪そうに見えるのにこういう時だけ妙な連携しないで欲しい。
「はぁ……。帰ろ」
怒鳴る気力も吹っ飛んで、私は今度こそ逃げ出す。本当にそろそろ、みんなの様子を見て回んないとまずいからね。
「まあ頑張れよ。おーいそれよりも店主、酒が無いぜー？」
「あんだけ注いだのにもう呑んだの、速っ!?」
背中越しに聞こえてくるミスティアと黒い人間のやりとりを聞きながら、私はもう一回だけ振り返る。
「ミスティアー、呑ませるお酒が無くなったら水でも飲ませとけば」
「ああそれ良いかも」
「おいおい蛍じゃあるまいし。全然良くないぜ、水ばっか飲めるか」
憮然とする黒白を見ながら私は頭をかく。
…………やっぱり全然似てないよなぁ。

「これだから人間はもう。ちゃんと水にも味があるんだよ、知らなかった？」

（ほたるこい　完）

〈作者コメント〉

はね～～です、皆様こんばんはー。
創刊号より続いておりましたほたるこい、以上にて完結です。多分読んだ人の多くが『ラストの文章いらねー！』って思っただろう気は激しくしますが、残念ながら私はラストの文章こそが書きたくてこの話書いてます、あしからずご了承下さい（苦笑）
ひかりが魔理沙の前世かどうかですが、真実はザナさんか小町にでも聞かない限り分かりません。でも多分二人とも教えてくれないでしょうね。謎なままの方が美しい事は、世の中多いのです（ただ読み返すと色々と狙ってる部分がボロボロ見つかるのは否定しません）
それにしても恐ろしいことに……ほたるこいって打った後につい変換を押したら素で『蛍恋』になりました。流石はラブコメに毒されまくりのうちのパソ（汗）
この話はラブコメじゃないつーの！　ちなみに蛍が光るのは主に結婚相手を探す時だそーです。だからラブコメじゃ（ry
なおこの話は元々、第5回東方SSこんぺに出そうと思った話でしたが（その為に『水』という題を最大限意識した構成になっています）進行度25％の時点であっさり〆切が来てしまいお蔵入り確定だと思ったんですが、月刊ナイトバグのおかげで日の目を見ることができました。小崎さんありがとー！

最後にこの作品を書くに当たって、私の心に刻み込まれている参考文献を以下に。

・火垂るの墓（スタジオジブリ）
・銀色第一章（ねこねこソフト）

ではでは……最後までお読み頂けました皆さんに最大の感謝を。
皆さんの枕元に、大量のリグルが現れます事を祈っております（お）

はね～～@L-53a（来月は流石に出すの無理かも……）

Q：ここから魔理沙とリグルの百合話になるんですね！
A：なりません。私の場合、魔理沙の恋人は永遠にチルノです。そこんとこ宜しく。

冒険者なヒトたち

〜スキマ鈍行列車はぐれ旅〜

著者：ハンダゴテ

——もう一度だけ問いましょうか。

——私は本当に必要なのか。

朝目が覚めて、何故か直ぐに起き上がる気になれなかった。

周囲には蟲達の気配。物陰から覗き見るように余所余所しくこちらの様子を窺（うかが）っている。

群がる小さな息遣いの中では、例え人工物の中に居ようと自分だけが異物の様だった。

周囲には蟲達の気配。階下にも外にもそれ以外の気配は無く、確かに自分だけが異物だった。

ここはあまりにも騒がしく、あまりにも静かだ。

異常を正しく理解すると、顔を洗う為にリグル・ナイトバグは階段へ向かった。

「セラフィム！　これはどういう事ですか！」

激昂する少女の剣幕に、熾天使（セラフィム）と呼ばれた少女は振り向いた。

陽光を背にする執務机。その質実剛健な革張りの椅子に納まりながら、さっきまで見ていた窓からの光景に名残惜しさを感じる。真っ直ぐに配置された植木と僅かな汚れすら許さない良く整備された道は、人の愚かさと虚勢を象徴しているようで好きなのに。

もっとも、目の前の少女は英知だと言い張るだろうが。

「これ、とは何のことかしら？　何かあったのかしらね、ドミニオンズ？」

キィ、と椅子を揺らしながら答える。今の音は蟲の鳴き声に聞こえなくも無い。——もっとも、この場所ほど蟲の存在が許されぬ場所も無いだろうが。

「何かあったのか、とは白々しい。この街で起こることに私が気付かぬとでもお思いか」

ピン、と張り詰めた声で問い詰めてくる。一見涼やかな声ではあるが、彼女の部下が見ればそこに込められた怒気に震え上がるだろう。

「本日日の変わりと共に一人の市民が消えました。予告も前兆も無く、突然にです。彼女は確かにそれまでは存在していたのに、日付が変わると同時に影も形も残さず消えてしまった。……こんなことが出来るのは貴方において他ありません」

「あらあら。人を犯人と決め付けるのは良くないわ」

「違うのですか？」

「いやまあ、そうなんだけど」

疲れたようにひとつ重い溜め息を吐くと、糾弾を続ける少女は言った。

「何故このようなことをするのです？　彼女の存在を消すことに意味があるとは思えない。納得のいく返答を要求します、神隠しの

主犯よ」
「この世に意味のないことなんて無いわ。意味のあることと同じくらいにね」
「それは一体どのくらいなのですか？」
「ふふふ」
「……セラフィム」
「やあねえ。そんなにキリキリしてたら今に皺だらけのお顔になっちゃうわよ？　女の子はもっと笑っていないと」
「人一人消しておいて何をヘラヘラと……！」
　少女にしては珍しく、感情を露わにして手にした棒切れを突きつける。ピタリと狙いを椅子に腰掛ける人物の額へ据えると、その怒気を叩き付けるように声を荒げた。
「貴方はいつもそうだ……！　そうやってのらりくらりと誤魔化して、肝心なことは全て自分ひとりで片付けようとする。今度は一体何を企んでいるのです？　何故私を……置いてけぼりにするのです……？」
　少女の声が次第に沈痛な響きを帯び、そして沈んでしまう。椅子に座った少女は、今度は真剣な眼差しを俯いた頭に向けた。
　——少女の怒りは二つある。一つは大切な市民を消された市長としての怒り。そしてもう一つは、頼られないという自分自身への怒り。
　この少女が他者に対して怒りを抱くことはない。他人の過ちでさえ、それを諫(いさ)められなかった自身の責と考えてしまう少女だ。斯く在るべしと言う理想に縛られた可哀相な主天使(ドミニオンズ)。彼女は理想に殉じる為に自身を食い潰す事を善しとしてしまっている。理想に近づこうと邁進(まいしん)するのは大層立派なことだが——それで自分を失くしていては意味が無い。
　過ちと共に自身を捨てる。故にその名は『無謬の裁』。
　少女のそんな名を、彼女は呪いとしか考えていなかった。
(私が貴方なら、私はこう言うでしょうね——『貴方は責任を負い過ぎる』)
　だからこそ——全ては任せられないのだ。
　まあいい。それとこれとはまた別の話だ。今は彼女の話をしよう。
「今あの子はね、この世界のスキマを漂っている」

　外は炎天下。今は夏も盛り。焦げたアスファルトの臭いが鼻につく。
　夏は暑い。重い足を引き摺り彷徨(さまよ)うように歩く。汗は滝のように落ち、体は震えそうなほど寒かった。
　——相変わらず感じられる気配は何処にも無い。いや、あるにはある。しかしそれは遠い、ただ覗き見るだけの蟲達の気配。
　彼らは何故こっちに来ないんだろう？
　ひとりくらいは近寄って来てもいいのに。
　こちらが一歩近づけば、向こうは一歩引く。
　ざあざあと波のように遠のいて。
　独りになったリグルは、また当ても無く彷徨い出した。
　夏は暑い。
　足は重い。
　体は冷たい。
　——元々夏は好きだった。蟲達の活動が最も活発になるのはこの季節だ。彼らの声を聴くのが好きだった。彼らの姿を見るのが好きだった。そしてそれは、今でも変わらない。
　それがいつの間にか、自分の知らない別のものに変わりつつある。
　指先はかじかんだように冷たい。
　足は氷漬けのように感覚が無い。
　背中を流れるのは冷や汗。
　猛暑の中。
　熱病に浮かされたようにリグルは彷徨っていた。

　——そうして辿り着いたのは、古ぼけた駅。
　——ガラクタを積み上げたような外観。無人のホーム。改札を潜(くぐ)った記憶は無かった。
　——棺桶(かんおけ)の様な木造の列車に乗り込み、
　——リグルは、ようやく人の姿を見た。
「どういうことです？」

「そのままの意味よ。見た目はこの世界そのもの、でも中にはだあれもいない鏡写しのような世界を作り上げて、そこに放り込んだの。あそこにあるのは無人の街と空っぽの視線と、あの子だけよ」
「……そんな回りくどい事をしてまで彼女を隔離する理由がどこにあるのです？　私には到底理解し難い。彼女はただの一市民でしょう」
「今は、ね。しかし誰もが化ける可能性を持っているとは思わない？」
「……彼女が何になるというのです？」
「なる、とは言わないわ。彼女にはただ可能性があるというだけ。――導き手の、ね」
「馬鹿な……！　彼女はただの一市民だ！　ごく普通に暮らしてきた一般人でしかない！
　それが我らの失った〝アーク〟であるなどと……」
「あら？　あんなことをやらかした彼女が一般人だというのかしら？　そうしてこの街に引き寄せられたあの子が？　貴方だって知っているでしょう、あの子の〝本質〟が見せたスペルカードを」
「知っているからこそ……この街では心静かに暮らして欲しいのです」
「それは無理よ。魂と運命は共鳴し合い、お互いを引き寄せる。彼女の〝本質〟が全ての事件を引き寄せてしまうわ。そしてそれは恐らく『湖岸の月』でも止められないでしょう」
「――堕天に堕ちた能天使ですか。確かに彼女は運命を操ると聞いていましたが……」
「彼女は堕ちてなどいないわ。今も『守護者』としてその役目を果たしている」
　そう強い口調で言うと、椅子に腰掛けた少女は先を続けた。
「それにね、あの子はその『湖岸の月』と接触している――『御使い』の言葉を受けてね。『御使い』の言葉があったとはいえ、彼女と接触できたことが偶然とは思えないわ。さらには今まで大人しかった鬼達の動きも活発になり始めている。鬼が時代的に果たしてきた役割とは一つ。それは導き手の育成。彼らは悪の権化だけど、それ故に世を善き方向へ導いてきた。――ほら、既にカードは開かれ始めているのよ」
「……貴方の憶測は偶然を結び付けたに過ぎない。そんなものはナンセンスだ」
「けれど――こういった偶然の積み重ねが歴史を作ってきたのではなくて？」
「…………」
「それに、私達よりよっぽど〝アーク〟に近いと思うわよ？　個の意志が強すぎる私達よりはね。
　彼女が本当に〝アーク〟としての素質を持っているのかどうか……それを確かめる為にも必要なことなのよ、これは」
　くる、と椅子を回して背を向ける。内心渋面を浮かべながら。
（とは言え……些か早過ぎた嫌いはあるわね）
「……彼女をこの世界に戻す方法はあるのですか？」
「あら。とても簡単なことよ。そう、方法なんて怖ろしくシンプル」
　キィ、と椅子が鳴く。少女はその艶やかな唇に言葉を重ねた。

「やあ。気分はどうだい？　あまり好待遇は出来ないがね、くつろいでは欲しいもんだ」
　熱に浮かされた視界ではぼんやりとしか光景を把握できない。ピンボケした視界ではその人物は黄金色の塊としか映らなかった。他にまともに働く器官は鼻くらい。幽かに嗅ぎ取れる臭いは……獣の臭い？
「ふむ。その様子だと幻術を掛けるまでも無かったか。まるで君の方が幻のようだ」
　音。音は届く。しかし意味が捉えた端から霧散し、頭に残らない。ガタゴトと伝わる振動に思考ごと揺さ振られ、リグルは今直ぐにでも自分が倒れるのではないかと思った。
「まあ立ち話もなんだ。そこに座り給え。実を言うと此処にあるものには何の意味もなくってね、君が隔離されてさえいればなんでも良かったんだ。ただそれじゃ君が可哀相だってんで、暇潰しの話し相手に私が遣わされたという訳だ。我が主の慈悲というか、最後の止めというか、まあそんなもんだよ」
　相手の動きは良く見えなかったが、何処を

指したのかは気配で分かった。糸の切れた操り人形のように、リグルは足を引き摺ってそちらに向かった。

「ああ、先に断っておくが、私は主から言えと謂われた事を言うだけだからな。君の慰み相手になる訳じゃないぞ。尤も、その状態ではまともに会話できるかも怪しいがね」

　そうして黄金色の相手は一方的に話し始めた。リグルはぼんやりと、化かされているようだと思いながら話を聞いていた。

「さて、まず英雄というものはね、自分で道を切り開く者のことでは無いんだよ」

「英雄とは人々の求める意思の総意だ。『斯く在れ』という人々の願いから生まれる人間の理想像。彼らは自分の意思で世界を救っているようで、その実救わされているだけなんだよ」

「何の話をしているかって？　だから英雄だよ。英雄の話さ」

「まあ先ずは話を全て聞き給えよ。質問はそれからにしよう。時間はたっぷりあるんだ、恐らく」

「彼ら英雄はね、世界を救うのにギリギリ必要なことしかしないんだ。最大限の努力で必要最小限の事を成し遂げるのさ。時にはわざわざ最悪の選択肢から回り道する事だってある。恐ろしく非効率だろう？　そりゃそうさ、人間自体が努力だの正義だのといった言葉に酔う生き物なんだから。そして悲劇を好む生き物でもあるから、彼らは一時的にしか世界を救わないし救えない。救った後には自らを破滅させる。何度も何度も繰り返すのさ。役者を替え舞台を替え、徹底的に舐り尽くすまでね」

「英雄ってのは人々の食い物なんだよ。甘くて甘くて美味しい禁断の果実だ。時には酸っぱく時には腐敗しているが、そこがまた堪らない」

「人々が特定の一個人を英雄と祀り上げ持て囃すのは、何もその人物が優れているからってだけじゃない。自分達も楽しみたいのさ、その栄枯盛衰をね。その証拠に、褒め称える時は良いことしか言わないで、転落したら一転、悪いことばかり取り上げて徹底的に攻撃するだろう？　ちょっと考えればそれくらい自分達だって普通にしていることだと分かる筈なのにね。ただの人間を聖人と持ち上げておいて、いざ不実が見つかれば裏切られたと非難する。――さぞ気持ち良かろうな、俗物共は」

「英雄の行動のほとんどはね、人々の求めた結果でしかないんだ。ただ求められた結果を、求められた行動を。――彼らは他者がいなければその方向性を決定できない。誰よりも強い意志を持ちながら、誰かがいなければ意思を持ち得ない。英雄とはそんな、誰よりも依存性の強い存在なのさ」

「けどね、彼らが世界を救ったということは紛れもなく事実なんだ。例えそれがやらされたことだろうと、彼ら自身が行動し成し遂げたことには変わりない。彼らの名を歴史に残したのは、間違いなく彼らの功績だ」

「英雄とは孤独の存在ではない。しかし英雄は必ず孤独になる。独りでは事を為すことは出来ず、事を為せば骨の髄までしゃぶられることになる」

「なんとも不憫な『おもちゃ』なのさ、英雄って奴は」

「さて、私の話は以上だ。何か質問はあるかな？」

「何故こんな話をするのか、か。思ったより意識はしっかりしているのかな？　それとも曖昧な印象で言葉を発しているだけなのか……」

「まあいい。質問の答えだがね、そんなの私の知ったこっちゃ無いよ。出来るもんなら直接主に聞いてくれ」

「私が聞いた話からの憶測だがね、我が主は本気で君が英雄になれると思っているんじゃないか？」

「そんなことを思っているのは主だけだよ。こんなこと誰が聞いても信じないだろうし、もちろん私だって信じちゃいない。だが何より一番信じられないのは君自身だろう。本当、質の悪い冗談としか思えないよ。――未来でも視ない限りはね」

「私には何度想像しても君が英雄になれるとは思えないよ。こんな――」

ペキリ、という音と共に神経が繋がる。
「——、——、ッ!」
(指、左手の小指、折られた)
　悲鳴を上げることも敵わない激痛の中、苦労して事態を把握する言葉を拾い上げる。体の片面だけが冷たい。視界が横倒しになっている。どうやら自分は床に倒れているらしい。突然鮮明になった視界が涙で滲み、滲んだところで誤魔化しようのない冷たい視線に見下される。
「こんな矮小な君が、ね」
「——、——、ッ!」
(何? 何を言ってるの?)
　思考が晴れた瞬間吐きかけられた侮蔑に混乱が加速する。ついさっきまでこの人物と話していたような気がするが、断片的な記憶で意味が繋がらない。いや、個々の意味さえ覚えているか怪しい。
「やれやれ、指一本でここまで騒ぐとは。やはり君に素質があるとは思えない」
「、——ッ、——ッ!」
　理不尽を言われている。リグルはなんとか頭を持ち上げると、有らん限りの力で相手を睨みつけた。
「ふむ。思ったより根性はあるようだ。それでどうなるものでも無いがね。……さて、私はもう言うべきは言った。これで失礼するよ。
　ああ、そうそう。此処から出る方法だがね。残念ながら君に出来ることは何もないよ。外から呼ばれれば自然と出れるだろうが、呼ばれなければこのまま消滅だ。主は君が消えれば我らの世界も消失すると言っていたが……私には信じられんし、興味も無い。どちらであろうと、私には関わり合いの無いことだ」
　その言葉を最後に、九つの黄金の尻尾を広げた女性は幻のように消え去った。
　持ち上げていた頭を下ろし、床に押し付けると、リグルはガタゴトと揺れる床の上で体を丸めていた。

◇◆◇◆◇◆

「呼ばれれば良い。それだけよ、彼女が帰ってくる方法なんて」
　くるり、と椅子が回る。ゆるりと流れる景色を眺めるともなく眺めながら、口の端を歪めて言う。
「ほら、酷くシンプル。他力本願なんてとてもあの子らしいと思わない?」
　ぴたりと椅子が止まった時には、目の前に再び突きつけられた棒切れがあった。
「そこを退きなさい。その席はこの街を治める市長の席。市民を嗤う者の座る席ではありません」
　交わる視線に温度はなく、二人の間には突けば割れそうな緊張感が漂っていた。
「……第四位の貴方が第一位の私に敵うと思って?」
「そんな事はどうでも良い。大事なことは唯一つだけです」
　身を乗り出し、下から睨めつけると、棒切れを拳銃かナイフのように突きつけて少女は言った。
「貴方は私の大切な市民を嗤った。それだけだ」
　椅子に腰掛けた少女は無表情のまま顔を突き合わせていたが——やがて降参したように両手を上げると、腰を浮かせながら言った。
「オーケー。ここで争うことは互いに無意味だわ。大人しく引き下がりましょう」
「…………」
　相手が立ち上がったのを確認すると棒切れを突きつけていた腕を下ろし、無言のまま踵を返す。
「あら、何処へ行くのかしら?」
「少し用事が出来ましたので。——ただの迷子探しです」
「……ただの一市民の為にそこまでする?」
「ただの市民ではありません」
　キッ、と視線を向け振り返ると、きっぱりと言い放った。
「大切な市民です」
　再び踵を返し、今度は向き直らずに真っ直ぐ扉へ向かう。扉を開け、後ろ手に閉めようとしたところで——ポツリと呟く声が聞こえてきた。
「私は——貴方のことを親友だと思っていま

した、八雲紫」

「私は今でもそう思っているわよ、四季映姫」

　声は届いた筈だ。振り切るように響いた扉の閉まる音が、その答えも一緒に部屋の向こう側へ持って行ってしまった。

　誰もいなくなった部屋で立ち尽くしながら、少女は誰にも届かない呟きを発した。

「これは彼女自身の問題なのよ。――そして私達の問題でもある」

　やがて、市内全域に向け迷子探しのアナウンスが聞こえてきた。

――――――――――

「さて、読者の皆さん。ルールはお分かりかしら?」

「悪いけれど、あまり懇切丁寧に説明する気もないのよね」

「果たして何事も無かったように物語は再開するのか、それとも初めから何も無かったようにさっぱり綺麗に消えてしまうのか」

「これが最後の決断よ。果たしてどちらになるのかは貴方の行動次第。何もしなければ何にもならないし、何かをすればどこかに繋がるかも知れない」

「期間は……そうね、二週間といったところかしら?」

「貴方は果たして一人求めた卑怯者を許容するのか、それとも拒絶するのか……」

「どちらが幸せなのかしらね?　貴方にとって、私達にとって。そして何より、彼女にとって」

「さて。それではこの辺でお暇（いとま）すると致しましょう」

「それではまた。もしくは永遠にさようなら」

「貴方の答えはどちらなのかしらね……?」

（終）

〈作者コメント〉

　二週間前にでっかいGを仕留めました。ハンダゴテです。

　今回かる～く済ませるつもりが締め切り三日前にドドッとページ数増えました。具体的には藍さま分くらい。あ、あれ変装したこーりんとかじゃなくて藍さまだよ、念のため。

　割と核心的なところに触れつつ物語が進んでないからさっぱり分からないという相変わらずの置いてけぼり仕様です。でも割と自分らしい文章になったので満足。色々触れてると長くなるのでこのくらいで。

リグルと紅魔館

著者：MAL

　バルコニーにある洒落た椅子に座る館の主がいた。ここ数年ろくに楽しいと思える出来事がないつまらない日々を過ごしていた。
　彼女は他人任せな一面を持っている。だがここ数年のおかげで自分から動く楽しさというのを思い出すことが出来た。
　ここ数日間、ここに座り、何か楽しい遊びはないのかと考え続けていた。
　そんなある日、館の主はパチンと指を鳴らした。
「これよ、これは楽しいに違いないわ！」
　館の主は夜空を見上げながらボソッとつぶやき、おもむろに笑みをこぼした。

＊＊＊

　それから数日たったある日のこと。いつものように人里のすぐ近くに屋台があった。火は灯っているがあからさまに人が少なかった。
「あのさぁ、ルーミアがいると人が来ないんだけど？」
　呆れた顔をしながら店主は言った。しかしルーミアは耳を傾けようとしない。注文した八目鰻の蒲焼をおいしそうにほおばっていた。
「リグルも何か言ってあげてよ」
　店主はルーミアの隣にいたリグルに話題を振ったが面倒臭そうな顔をしながら言い返された。
「いや、私は関係ないでしょ？」
「リグルってそんなこと言うんだ。じゃあ、今日のおごりなし」
「えー、いまさらなしって言われても払うものがないよ」
　二人が言い争っている光景を見てルーミアが思い立ったように口を開いた。
「あっ、そうだ。昨日こんなもの拾ったんだけど」
　客が来ない元凶のルーミアはポケットから一枚の紙切れを取り出した。それを見るなり店主は答えた。
「あっ、それって今朝に天狗達が一斉に配った号外じゃない？」
「ミスティアも知ってたんだ。リグルは？」
「えっ、そんなの見た覚えないよ」
「じゃあ見てみたら？」
　ルーミアはリグルに紙切れを手渡した。読みながらリグルは内容を朗読した。
「何々……霧の湖で祭りを開催する？　でも再来月か」
「それだけじゃないよ。ちゃんと下を見てみて」
「下って店が出せることしか載ってないけど……まさか店を出す気？」
　リグルは視線を上げてルーミアを見た。半分予想はしていたがルーミアは顔を見ただけで当然とわかるような表情をしていた。視線を逸らしてミスティアを見ると当たり前だよ

と言わんばかりに首を上下に振っていた。
「ミスティアは店を経営しているから出店するのもわかるんだけどルーミアは一体どんな店を出すの？」
「んー、今の所は釣り道具貸し出し店かな。霧の湖はいい釣りのスポットって聞いているからね」
「釣りってまた祭りとはかけ離れた想像をしているなぁ。仕方ないから一緒に考えるか」
　今まさに盛り上がろうとしたところにミスティアは口を挟んだ。
「できれば家で話し合ってくれない？　やっぱりルーミアがいると屋台の売り上げが著しく落ちるから」
　できれば言いたくなかったことだが生活がかかっているので仕方ないことだった。悪い返答がない事を必死にミスティアが祈っているとルーミアの声が聞こえた。
「んー、ここは友達に免じて話し合う場所を変えてあげよう。ってことでリグルの家空いてる？」
「たまにはルーミアの家に行こうよ。こう毎回散らかされたら溜まったものじゃないよ」
「いいじゃん。どうせ私達以外誰もこないしさー」
　帰って行く様子を冷や水を飲みながら見ていたミスティアは二人がいなくなったのを確認してほっと胸をなでおろした。そして屋台の隅に置いてあるオルゴールを持ってきて、その華麗な音色をあたり一面に響かせた。
　しばらくすると人が集まってきた。これからが今日一番の仕事だとミスティアは気合を入れなおした。

＊＊＊

　それから二ヶ月が過ぎた。昨日のように話していた祭りがとうとう後三日で開催される。
　紅魔館の敷地内ではレミリアの意図により、祭りに来た人のためにガーデンテーブルとガーデンチェアを用意していた。
「ガーデンテーブルはそこに置いて。チェアの方はさっきも言ったとおり三つね」
「わかりました」
　中華服を身にまとった妖怪は器用にガーデンチェアを三つ重ねて運んでいた。それを片目で見ながら指示をしているメイド服の人間はあたりを見渡していた。
「咲夜さん、どうしたんですか？」
　妖怪は咲夜の顔色をうかがいながら尋ねた。哀愁漂う顔をしながら咲夜は小声で答えた。
「やっぱり妖精メイドは質より量だったのね」
　この紅魔館の広い敷地には二人以外誰もいなかった。館に住み込みで妖精メイドが大量にいるはずなのにこの有様である。誰がどう見ても妖精メイドは質より量の存在であった。
　当然、そのことを館の主も理解している。過去に一度、それに痺れを切らした咲夜は主に対して文句を言ったことがある。しかし主は咲夜の発言を軽くあしらった経緯があった。
「仕方ないですよ。自分が良かったらいいと思うのが妖精なんですから」
「それよりもっと根本的な問題かもしれないわよ。三日後にちょっとずつでも変わってくれれば……」
「んっ、咲夜さんどうしたんですか？」
「ああ、ちょっと嫌なことを思い出して……ってつべこべ言ってもいいけどちゃんと次のテーブルを運びなさい」
「は、はい！」
　喋りながらも咲夜と美鈴の運搬作業は着々と行われた。それから何時間経ったのだろうか。気付けば夕日が顔を出していた。まだ作業をしている美鈴はガーデンチェアを置いた。その後、大きなため息を吐き、額にかいた汗を手で拭いながら言った。
「これで最後ですよね？」
「そうよ。お疲れ様。これから門番の仕事もあるけどその前に食事をするから中に入ってきなさい」
「は、はい。わかりました」
　誇らしい笑みを浮かべながら美鈴は咲夜の後を追いかけるようにして紅魔館の中に入っていった。

＊＊＊

　美鈴たちが紅魔館に入ったのと同じ刻。リグルの家では怒鳴り声が響いていた。
「ルーミア、もう一度言ってみろ！」
「だ、だから申し込みを忘れてたって」
「人が折角用意したのになんで忘れるんだよ！」
「ごめん……」
　リグルは二十人分の釣竿を用意していた。これは里の人に頼み込んで貸してもらったものもあれば、苦労して手伝いをしてもらったものもあり、まだ足りなかったので自作したものもある。全てはルーミアの為を思ってのことだった。
　しかしルーミアは一番重要な出店の申し込みを忘れていたのだった。しかも締め切りは二十日前。今の今までリグルはルーミアを信じてこのことを聞いてなかったが一向に言ってくる気配がなかったので尋ねてみたらこの様だった。
「ここまでルーミアが頼りにならないとは思ってなかったよ」
「ごめん……」
「もう謝らなくていい。うざいから」
　ルーミアはどうしていいか分からずただ平謝りをするだけだった。それが出来なくなると残るのは後悔が生む無言の空間だった。
　しばらくするとリグルが行動に移した。立ったままのルーミアは少しびくっと体を震わした。しかしリグルは椅子に座って本を読み始めただけだった。ルーミアはほっとしたが結局この状況は変わっていない事に気付き頭を抱える一方だった。
　さらにそこからまた時間が経った。ルーミアが何も出来ずに突っ立っているのに見かねたリグルは本を机の上に置き、低く図太い声で言った。
「もう帰れ」
「……えっ？」
　突然の言葉にルーミアは戸惑うことしか出来なかった。不幸にもルーミアの返答はリグルにとって気に入らないものであった。リグルは机を思いっきり叩いてから立ち上がり、ルーミアの顔を見ながら怒鳴った。
「とっとと家に帰れ！　帰れって言ってるだろ！　早く帰れ！」
　今まで保っていたルーミアの顔が瞬く間に崩れた。そしてすぐにルーミアは腕で目を覆い、リグルの家から飛び出た。
　飛び出して走ったのはいいがルーミアは腕で目を覆っているので前が見えずに大木に思いっきりぶつかってしまった。それはとても痛かった。でもその痛みは所詮、ルーミアがさっき受けた心の痛みとは比べ物にはならないものであった。
　頭の痛みもあってルーミアはその大木の前で泣きじゃくり始めた。シャツの袖で止まらない涙を受け止めた。
　すぐに袖では涙が拭いきれなくなったのでポケットからハンカチを取り出した。それは緑色のたいしてセンスのよくないハンカチで以前リグルから何かの記念で貰ったものだった。しかしそれでルーミアは自分の涙を拭くことが出来なかった。
　ありったけの力で大木を叩いた。叩けども叩けども手に痛みが伝わってくるだけであり、気持ちが落ち着くことは全くなかった。
　痛みで手が動かせれなくなり、悲しみで前が見えなくなり、ルーミアはその場に座り込むようにして倒れた。

＊＊＊

「ここ一ヶ月ぐらいあの二人が来ないなぁ。きつく言い過ぎたのかな」
　ミスティアが屋台の片づけをしていた。隣では興味津々な様子の妖精が一人いた。
「あたいも数日前に見たっきり二人とも見てないよ」
「チルノも見てないんだ。となるとやっぱりリグルは家にこもっているのかな」
　チルノが鰻が入ったビクに手を突っ込もうとしたのをミスティアは真剣な顔をしてとめた。幸い鰻は凍らされていなかった。
「ところでなんで屋台を閉じるの？　まだ昼だよ。それに鰻はいっぱいいるよ」

「知らない？　今夜、霧の湖でお祭りがあるんだよ」
「えっ、あたいのテリトリーでお祭り？……あっ、だから最近テントとかがたくさん置かれてたんだ」
「そうそう。今日はそこでこの鰻を売るから屋台を閉めたの。わかった？」
「うん、わかった」
　その後、チルノは眉間にしわを寄せて考え事をし始めた。すぐに元の顔になり、何かをひらめいたらしく手を叩いた。
「そうだ。リグルを呼ぼう。きっと今日も家からでないつもりなはずだ」
「そうかな。今夜はリグルたちも出店するから家を出ると思うけどって……聞いてなかったか」
　屋台を片付けているミスティアを尻目にしてチルノはリグルの家へと向かっていった。
　最初のうちは勢いよく飛んでいたチルノだが次第に暑さにやられて歩くようになった。仕舞いには木陰で入って休み始めた。かなり体力が消耗されたのかチルノは土の上にどさっと腰を下ろし、手をだらけさせた。ただ木陰に入ってちょっと休憩するつもりがそのまま昼の闇に襲われてしまった。
　無意識に空いていた口を閉じた。続けて目を開けるがまたしても闇の中だった。だがよく見ると遠くにうっすらと赤い何かが見える。その赤い何かを見つめていくうちにチルノははっと気付いた。寝起きで働いていない頭を叩き起こして立ち上がった。
「ま、祭りが始まる！」
　チルノは大慌てでリグルの家に行った。幸い、そこまで遠くなかったのが救いだった。
　十数分後、チルノはリグルの家に着いた。しかしリグルの家には明かりがついていなかった。
「んっ？　もう行っちゃった？」
　ドアの前に立つと左目にうっすらと物陰が見えた。よくよく見てみるとそれは大量の釣竿だった。その下には大量のバケツが重ねられていた。その異様な光景を見て、チルノは少し怖気づくも戸をノックした。
　まさかこんな中にリグルがいるはずがない。と思った矢先、中から返事が来た。
「ほっといてくれよ！」
　それはひどく素っ気ない返事だった。ただノックしただけでリグルに怒られたチルノは唖然として突っ立った。その後、二度目の返事がなかったのでチルノはノックをしながら問いかけた。
「リグル。なんで怒ってるの？」
　この言葉を最後に会話が途絶えた。怒るなら直接言ってほしいのになんで顔を合わさないのかもチルノにとって不思議だった。
　チルノは言葉が返ってこないのにイラつきを覚え始めた。幾度も舌打ちをするがその効果は全く無かった。
　とうとうチルノは耐え切れなくなって戸に手をかけて一気に開けた。もし開かなかったら壊してでも開けるつもりだったがその必要は全くなかった。
　開かないと思っていたチルノは無駄に入れすぎた力に振り回され、危うく戸に頭をぶつけそうになった。そのとき、一瞬だけ平生を取り戻したがすぐに前の感情を思い出した。
　電気は点いていなくてどこにリグルはいるかわからないがチルノは大声で叫んだ。
「あたいは何にも悪いことはしてない！」
　すると返事ではなく、予想外の音が聞こえてきた。それは鼻をすする音だった。それを聞いて戸惑うチルノにリグルはかすれた声で言った。
「チルノ……今日は帰ってよ」
「あたいは帰らないわ。意味もなくあたいに怒鳴った責任を取ってもらうわ」
　返されたくない言葉をチルノは返した。決してチルノはリグルの気持ちを把握していないわけではない。かと言ってリグルを責めたいわけもない。
「今からあたいと一緒に祭りで楽しまないと絶交！」
　リグルはしばらく黙り込んだ。このままずっと黙り込まれたらチルノには何もすることはない。
　段々とチルノの目が暗闇に慣れてきた頃、ごそごそとリグルが体を動かす音が聞こえた。
「着替えるからちょっと外に出てて」
「わかった」

リグルの気分が優れていないのは声を聞いて一目瞭然だ。でもこの返事が来てチルノは少しうれしかった。
　チルノは一旦リグルの家から出た。そしてすぐに家の明かりが点いた。明かりが点くとなおさらこの釣竿が気になってしょうがない。
　数分後、普段着のリグルが家から出てきた。リグルが何か話そうとしたのを遮るようにしてチルノは無理矢理リグルの手を引っ張り、祭りの会場である霧の湖に向かった。

＊＊＊

　予想以上の賑わいに妖精メイドたちも大いに働くべき状況だった。しかし働いているメイドは数人しかいない。他は多分、祭りに便乗して遊んでいるのだろう。
　いくらなんでも手に負えないほどの人の量だった。この状況に本当は選びたくなかったある選択を咲夜は選ばなくてはならなくなった。
「美鈴、本当にいいの？」
「もちろんです。咲夜さんが働いているのに私が働かないのも性に合わないんで」
　美鈴は祭りの日は館の主から休暇をもらえる事を知っていたので出店をしていたのだ。
「でもこの店はどうするの？」
「んー、そうですね。誰かしてくれる人を探すか閉店するかのどちらかですね」
「私としては閉店をさせたくない。誰か暇そうな人を探すわ。それまで待っててくれるかしら」
「待つのはいいですけど敷地内警備の方はどうするんですか」
「今は妖精メイドを頼るしかないわ」
　そう言うと咲夜は時を止めた。そしてこの周辺一帯で手を貸してくれそうな人を探した。止まっているだけあって目的の人を探すのは容易だ。しかし見た目だけで信用に値する人を探すのは一苦労だった。
　そんな時、咲夜は紅魔館の対岸で暇そうに歩いている二人の人物を見つけた。二人とも一応面識はあるので話せば手を貸してくれると踏んで時を動かした。
「ちょっとお二人さんいいかしら？」
　その二人とはリグルとチルノだった。二人ともいきなり現れた咲夜に目を驚かせるばかりだった。
「あ、紅魔館のメイド長！」
「紅魔館のメイド長……」
「ちょっとしたことがあってあなた達に店を任せたいんだけどいいかしら？」
「えっ、いいの？」
「ええ。今からそこに案内するわ。ついて来て」
　咲夜は振り返り、来た道を歩き始めた。それにチルノは目を輝かせながらついて行った。
「なんだよ」
　怒った口調でリグルは言った。咲夜は不思議そうな目でリグルを見た。
「こんな……こんなことだったら初めから喧嘩なんてしなかったらよかったじゃないか」
　途中から声に力がこもっていなかった。視線を向けるとリグルは手で顔を覆って前を見ていなかった。チルノは心配した様子を見せながらリグルに話した。
「リグルさぁ。いったい何があったの？」
「今は……話したくない」
　この言葉はきっとリグルの心からの願いだろう。咲夜はまさかチルノがそこでリグルが話したくない中身を聞くとは思ってもいなかった。
「今、話して。そんなうじうじしているリグルはリグルじゃない」
「……話したくない」
「だめ。話して」
「だから」
「だからじゃなくて話して」
　一歩も引かないチルノに対しリグルも同じく一歩も引かなかった。しかし、理性が抑えられなくなったのか今まで言いたかった本音がリグルの口から漏れた。
「ルーミアのせいだよ！」
　この言葉にはチルノも、全く状況を知らない咲夜でさえ目を疑った。リグルはやけになってそのまま言い続けた。
「店を出せなかったのはルーミアが全部悪い

んだ。私はこれっぽちも悪くないんだ」
「ルーミアが……悪い？」
「ああ、そうさ。あいつが出店の申し込みを忘れたからな」
「それは……確かにルーミアが悪い」
　チルノがリグルの言い分に納得した。だが咲夜は納得していなかった。
「リグルと言ったかしら。さきほど、あなたは全部ルーミアのせいって言ったけどそれは大きな嘘ね」
「大きな嘘？　あいにくこれは全部本当のことなんでね」
　それは言いたい事を全て言ったリグルにとって気に障る言葉だった。
「じゃあなんで喧嘩なんて初めはしなくていいって言ったの？　それは自分にも過ちがあるから言ったんじゃない？」
「そ、それは……」
「少しでも自分に非がある事を本当は認めているんじゃないの？」
「……」
　チルノはああ、確かにそうなると無言でうなずいた。そんな中、声の調子をいつものように戻して咲夜は言った。
「それより店の件だけどあなたたちのうちの一人でもいいからやってくれないかしら？」
「あたいはやる。もちろんリグルもやるよね？」
「や……やるよ。やればいいんでしょ」
　リグルにとって不本意だったが今のチルノに逆らうことが出来なかった。

＊＊＊

「うわぁ、立ってる人までいる」
　それは美鈴が門のところから紅魔館の敷地を見た感想である。大規模にはなると予想していたがその予想よりもはるかに上回る数の人だった。
　隣にいた咲夜が今日の仕事についての説明をし始めた。
「美鈴には紅魔館の玄関に一番近いエリアの警備をしてもらうわ。喧嘩とかあったらとめなさい」
「エリア？」
「現在働いているメイドの総数は九人。私含めて三人は外の警備をしているわ。そして残りの六人で紅魔館の敷地を縦二つ、横三つの六等分したエリアを警備するということよ」
「わかりました。まかせてください」
　美鈴は人ごみの中を突き進んでいた。その様子を見た咲夜は一安心したので自分に託された仕事をこなす事にした。
　今日の紅魔館はいつもと違う。それは紅魔館に住む誰もが思うことだ。特に美鈴はそれを実感していた。
「あ、レミリアお嬢様」
「あれっ、美鈴。今日は休暇じゃなかったの？」
　優雅な衣装を身にまとったレミリアがいた。一目で今日の祭りのために張り切っているのがわかる。美鈴はレミリアに今までの経緯を説明した。
「そう……でも妖精メイドも楽しんでいるからいいんじゃないかしら？」
　美鈴はその言葉に少し引っかかる点があった。周りを見渡してみると確かに皆が皆、祭りを楽しんでいる。そう、ここ数年間まともな笑顔を見せたことがないレミリアお嬢様でさえ大いに楽しんでいるのだ。
「美鈴、今日の分は弾ませてあげるわ」
「そんな滅相もないお言葉を」
「いつもいつも謙遜しすぎよ。じゃあ、私は祭りを満喫してくるわ」
　そう言うとレミリアは人ごみの中へ消えていった。だが美鈴の頭の中のつっかかりは消えることはなかった。むしろ段々とはっきりしてきた。
　今日の紅魔館は明らかにいつもより人の数が多い。それでレミリアお嬢様は喜んでいる。いつもは人が少ない、しかも大半が慣れ親しんだ人ばっかりだ。それでレミリアお嬢様は不満を述べている。
　なぜ紅魔館はそこまで人の出入りが少ないのか考えてみた。その原因はすぐに思いついた。それは人の出入りを妨げる物があるからだ。
　それは門。そして門番の私だった。そう、私がレミリアお嬢様の笑顔を奪っていた張本

人だった。
　そう思った瞬間、美鈴は自分の存在意義を失ってしまった。こんな辛い思いは一度もしたことがなかった美鈴だが、一つ言えることがあった。
「私はこの紅魔館に必要とされない人」
　誰にも聞こえないほどボソッと美鈴はつぶやいた。そしてゆっくりと紅魔館の門の方へ歩き始めた。
　誰も美鈴を止める人はいなかった。それは美鈴の顔があまりにも険しかったせいか、楽しさのあまり他人が見えなかったせいか。

＊＊＊

　美鈴がいなくなったのに気付いたのはそれから一時間ほど経ってからだった。
　紅魔館の敷地内で喧嘩が発生した。それに駆けつけた妖精メイドが打ちのめされたのを咲夜は聞いた。その喧嘩は収まったがそのとき咲夜は初めて美鈴がこの場にいなくなったことに気付いた。
　いくら休暇を割いてまで働かせたからと言っても放棄するならするで一言声をかけてほしかった。普段の美鈴ならありえないことである。
　すぐに咲夜はその場の周辺で聞き込みを開始した。しかし酒を飲んで酔っ払っている人にいくら聞いても埒が明かなかった。今日は全員が全員、酒を飲んでいるのは計算外だった。
　一つ聞き込みをしなければならない人がいた事を咲夜は思い出した。それは美鈴の屋台にいる二人、すなわちチルノとリグルだった。
「あれ、メイド長。そんなにあわててどうしたの？」
「二人とも美鈴を見なかったかしら」
「見てない」
　素っ気無い返事でリグルは咲夜に言った。これは困ったという顔をした咲夜は最後に一つ言い残した。
「じゃあもし美鈴を見たら門の前に来るようにって伝えて」
　そして咲夜は姿を消した。その後、咲夜がここ周辺にいないことをちゃんと確認してから二人は出店の机の下を見た。
「なんで逃げてるの？」
　そこにはすっかり怯えきった美鈴がいた。美鈴はつい先ほど現れて二人にかくまって欲しいと言い、ここの下に潜り込んだ。当然、この二人に口止めをさせていたのだ。
「もう、私は紅魔館に戻りたくないんです」
「なんで？」
「それは――」
　美鈴は二人にこのようになったことをこと細かく説明した。チルノはすぐに美鈴に同情したがリグルはそうではなかった。
「美鈴さぁ、笑顔ってそんなちょっとやそっとのことで奪えないんだよ」
「な、なんですかその言い草は。人が真剣に考えているのに」
　美鈴は文句を言ったがリグルの耳のは届いていないのかそのままリグルは話し続けた。
「第一、門番って自主的になるものじゃないはずだよね」
「あ、はい」
「所詮その館を仕切ってるレミリアって人が悪いんだよ」
　リグルははっきりとその言葉を述べた。一瞬だけ美鈴の顔が蒼白になったのは言うまでもない。
「レミリアお嬢様を侮辱する人は許さない」
　屋台の下から美鈴が出てきてリグルに攻撃しようとした時、背後に人の気配がした。美鈴はその気の持ち主が誰であるかはすぐに分かった。なぜなら今、背後にいる人は自分が一番知っている人であるからだ。
「さ、咲夜さん」
　パン。
　それは乾いた音だった。この音を聞いた誰もが手を止め、音の根源を見つめた。そこには今まで見せたことのないような怒りをあらわにしている咲夜がいた。
「何で勝手に自暴自棄になっているのよ」

咲夜は三人の会話を全て聞いていたのであった。たった一度チルノが視線を机の下に向けたのを見たからである。何の造作もないのにそこを見ると言うことは何かがあると踏んだのだ。
「勝手な行動を起こしてすみません」
美鈴が咲夜に頭を下げて精一杯謝った。そして頭を上げると人が増えていた。それはレミリアだった。
「美鈴。あんたのせいで興ざめよ。どうして逃げたのか理由を説明しなさい」
レミリアも少しながら怒っていた。美鈴は再びここまで至った経緯を話した。美鈴にとってレミリアの為を思ってした行動だった。だが結果としてそれはレミリアも不安にさせてしまう行動だった。
「確かに美鈴の言い分もわかるわ。門番がいるから紅魔館が近寄りにくいかもしれないのは確かよ。それはただあなたが厳しすぎるだけの話よ」
「レミリアお嬢様。いくつか申し上げます。美鈴は託された仕事を懸命にこなしているのにそれを批判するのはどうかと」
咲夜はレミリアの会話が終わると同時に質問をした。美鈴もここまで身勝手な言い方は頭にくるが相手が相手で歯向かえなかった。しかし咲夜は何のためらいも持っていないかのようにまた質問を浴びせた。
「後、妖精メイドの件ですがそろそろ働いてないのを解雇してください」
「咲夜。あなた主に逆らうとはどういうことなの？」
今、この場にはただならぬ空気が漂っている。話を聞くだけのチルノとリグルにとってはいち早く逃げ出したいほどだ。
咲夜はレミリアの問いに対し、果敢にも攻めの姿勢で答えた。
「主の過ちを正すのが従者の務めですから時には主であろうと逆らうことも必要なのです」
「ふん、飼いならされている分際でよくもまぁこんなに喋るものだ」
「ではもう一度聞きますが、なぜ妖精メイドを解雇しないんですか」
「妖精とは元から家がないのが多いのよ。それにを住む場所を与えることが何か悪いことでも」
「レミリアお嬢様にとって妖精とはそのような存在ですか。やはり直ちに解雇をすることを提案します」
「なんでそれが解雇につながるのよ。私は正しい事をしている。それが悪いとでも言うの！」
とうとうレミリアが声を張り上げて怒り始めた。咲夜が次に言葉を発しようとしたとき、先にリグルが答えた。
「そうなんだよ。自分が不利になればなるほど自分を正したくなるんだよ」
それはまるでレミリアを諭しているかのようにリグルはゆっくりと述べた。リグルはまだ言い続けた。
「第一、今回の美鈴の脱走の件はあなたのせいだ。話を聞いてみるとよくわかったよ。後、紅魔館に人が寄り付かない理由は妖精の多さにあるんじゃない？」
「いきなり何よ！　何で妖精の多さだけで人が来なくなるのよ！」
「チルノは経験があると思うけど妖精って人間から嫌われている存在なんだよ。懸命に働く美鈴がみすみす妖怪を通すわけがないよね。じゃあ通すのは人間だけになるね。元からそこに寄り付かない人間だけだけね」
リグルが言い終わるとレミリアは唇を噛みしめていた。もしここでレミリアがリグルを襲えばたちまちリグルの存在はなかった事になっていただろう。でもレミリアは統率者が故に人の意見をしっかりと聞く耳は持っていたのだった。
「本当に興ざめたわ。これまで自分がいいと思っていたことが覆されるってこんなに気分の悪いことだったかしら」
レミリアは力のない笑いをし始めた。それは不気味だけど同時に安心できる気がした。
「私自身が結果として自分の首を絞めていたのね。退屈とか不満とか結局は全て自分に帰ってくることに今まで気付かなかったわ」
レミリアは頭を抱えながらまだ笑い続けていた。そして笑い終えると真剣な顔をして再び話し始めた。
「咲夜、あなたの言ったとおり妖精メイドの

数は減らすわ。ただ、何人か意欲のあるやつは残して頂戴」
「はい、かしこまりました」
「美鈴、私のせいであなたに迷惑をかけてしまったわ。ごめんなさい」
「えっ、いや、あれは私が」
「だからあなたは謙遜しすぎよ。そしてあなた。蛍の妖怪だったかしら」
「はい」
「あなたも私と同じような臭いがするわ。これは直感だけどね」
「当たってます。私もそれで悩んでいた。だからあなたの気持ちが分かる気がした」
「取り返しがつかなくなる前にことは沈めなさい。まぁ、今の私が言うのもおかしい気がするけど」
　そしてレミリアは再び祭りを楽しみに、咲夜と美鈴は仕事の続きをするためここから離れた。残された二人はレミリアが言ったとおり興ざめたかもしれない。ここでチルノが一つ提案した。
「今からルーミアに謝りに行こうよ。絶対にルーミアだって許してくれるって」
「……うん。そうしようか」
　リグルの目は涙と笑顔で輝いていた。

＊＊＊

それから何日か経ったある日のこと。
霧の湖ではすっかり祭りの様子はなくなっていた。いつもの霧が濃い湖に戻っていた。
「リグルさぁ。魚釣りの餌って大抵虫とかだよ。大丈夫なの？」
「大丈夫さ。そのため今回は練り餌を持ってきたんだ」
「へぇ、上手いこと虫関連の事は回避しているね」
　二人ともまだ多少ぎこちない所が合るけど自然とお互いにぎこちなさはすぐに取れる気がしていた。
　糸をたらすこと数十分。ルーミアの竿に初めの獲物がヒットした。数分の水中の格闘の末、ルーミアは魚を釣り上げた。
「やったー！」
「おおっ、おめでとう。この魚は確か……ちょっと待ってね。今、調べるから」
「よし掴んだ。ってうわぁ、ぬめってしてる」
　ルーミアはバケツに魚を入れた後、ポケットから緑色でたいしてセンスのよくないハンカチを取り出した。それで手のぬめりを取った。そうこうしている間にリグルは魚図鑑で一致する魚を見つけた。
　そんな二人のやり取りを傍らで見つめる美鈴の姿があった。今日も彼女は門の前に立っていた。
　まだ紅魔館は人間にとって近寄りがたい場所だ。しかし時間が経てば自然とその過ちが正されていくだろう。そう、この二人のように。

（終）

〈作者コメント〉
　初めましての人は初めまして。ＭＡＬです。今回は夏だから祭りの話を書こうと意気揚々にネタの考案をしてきたんですけどあれですね。全くの皆無になってしまいました。後、長くなりましたが読んでくださってありがとうございます

8月号テーマ
ホラー特集
"ぎゃー！？"と"きゃー！！"　涼音 奏
吊り橋効果って素敵ですよね。という話のはずだったのですが、もう素でイチャついててくれという結論に達しました。
……でもリグルはそんな余裕無い方が愛らしい。うん。
--http://rshk.uijin.com/

この作品には虫描写や写真が含まれています。
蟲の手帖
描いた人 HOUSE
8月号
2009 AUGUST
■前回のあらすじ
夏までにあと3キロ。どんどん初心から離れていくリグルだった。彼女の明日はどっちだ。
人魂を見たんですッ

どっ

本当にしょうもない奴ねェ…
幽霊なんてどこにでもいるじゃない

私だって蛍と幽霊の見分けくらいつきます！ましてやその辺の幽霊を怖がったりしません！
l…それはいかにも幽霊が好みそうなジメっとした林から微かな光りを放ちながらフラフラっと飛び出したのです…

大方蛍でも見たんじゃないか？
違いますッ

不気味なことにそれからは
幽霊の気配がしないのです…
霊気や冷気か
ひんやり
毛玉
小妖怪だったとかは？
いいえ
あれは月光を反射した
光り方ではなかった…
確かに自ら光っていました!!
それで怖くなって逃げ出した…と
幽々子様!?
紫様まで
げ。
全く…みすみす
幸運を逃がして
しまうだなんて…
…はぁ
申し訳ありません
妖夢は本当に
愚図ねェ
あら
それでは「うん」違いよ
似たようなものですわ

年寄りの話は回りくどいぜ
そいつを捕まえると幸せになるのか？
少女ですわ
幻巣
スッ
・・・・・・
ま
概ねそのようなものかしら
…もっとも
妖夢の見つけたひとつだけでは無理ね
やはり大きくなくては様になりませんもの
一体辺り十枚葉のクローバーくらい？
パッ
それでは捕獲せよと何体も？
…妙なところだけは鋭い子ですこと
フフフ…
…はぁ…
？？
…雲を掴むような話ですね…
それは
・・・
パチン

…聞いた？
ガサッ
うん
ガサ ガサ
幸運の人魂!!
ひょこ
今年もいっちょやろうか幽霊狩り!!
ついでに幸せもゲット!!
冷気がないんじゃ冷房にはならないけどね
…んー？
幸運の人魂ってあれかしら？
で…
出たァーーッ!?
ねえ二人とも
ん
最終兵器

あれが幸運の人魂の正体とは…ね
やれやれ
あ
ちょっ…
ぴゅー
ん…
なんだ？
…妖精？
ガサッ
虫だ
あいたいた
お。
おーい魔理沙ー
人魂の大元よ!!妖夢捕らえなさい!!
はいっ
バッ
!?
なんでーーッ!?!

どういうこと？蛍は関係ないんじゃなかったの
あいつら後で掃除当番。
ええそうよ
あの発光体は蛍ではないわ

…今年の蟲は生きが良いみたいねェ
あぁ何やら新しいことも始めたようだからな

この調子ならかつてない慶雲が現れるのは間違いないわ
…慶雲？
そう
あの人魂は稀有な現象の予兆にしか過ぎない

「外」ではそれが穢れたものと呼ばれるようになって久しい…
かつて瑞雲と呼ばれたものは幻想となったわ

あなた八雲紫が言うと説得力があるわねェ
やっぱ年寄りだぜあいつら
…ふふふ

強いて言うなら…

ちょ…待ッ…私はただ 魔理沙に訊きたいことがあ…

あ……花火そろそろ始まるみたい
じゃあみすちー呼んでくるね！
タッ
そして誰もいなくなるのかー
くらげん
2人とも遅いねー
確かに…
あ！来たよ
おかえり～
あれ？みすちー…
は！？
ぽよん
…ルーミアさん？
そのふくらんだお腹は何かな…？
ギクッ

あ…そうだ
実はねー……
できちゃったの…
リグルの子♥
ぽっ♥
うわあぁぁぁ…
なんというホラー…
ひどいよ
リグルちゃん!!
私のことは
遊びだったのね!!
うわぁぁぁぁん!!
え…ええ?
ダッ

ねぇ…ひとつ訊いてもいいかなー?
ちんちん
ルーミアさん!!
ちょっと近いなぁ!!
ちょおっと近いなぁ!!!

カマキリのオスって子供産むときにメスに食われるって本当かー?
ちんちんちん
ちょww
腹から何か聞こえるwww
みすちーwww

おしまい

『 蟲と骨 』　豆板醤

今回初めての投稿デス、今まで”読者”だったけど今回は”投稿者”と言う立場でちょっと緊張w
しかし作品は蟲って設定がぶっ飛びました。人間の骨格になってます。
リグルファンの皆様、すみません。ホラーって事デスが、安直に骨って事で・・

『 恙虫 』 蛍光流動

求聞史紀より。実際ところ目に見えない設定ですが、見えてたらこんな感じかと。

『 Hello Insects 』　ADDA

残酷な殺蟲魔スクリーム！　みんな逃げて!!!

『 無題 』　モ誠幹

納涼　お化けなんてないさ・・・ということで一枚撮ってみたら、なにやら写ってはいけないものが写っていたようです

『 小さな虫殺しの大罪 』　シャリア

昨日ここで誰かが私の大事な仲間を殺したんだ……お兄さんは知ってるかな？
小さな命を大切に！もれなくリグルが付いてきます（ザシュ

『 あやかし 』　てつ

ホラー特集なので、昔のSSの構想があったのでそれをベースにして描きました。王女に喰われる、というシチュエーションが大好きなんです。このたび夏コミでサークル参加することになりました。リグルは登場しませんが、咲夜さんと美鈴が好きな18歳以上の方（！）がいらっしゃれば何かのついでにスペースまでどうぞ。
サークル「雪まんじゅう/二日目東館/C-44b」http://yukiman.yukihotaru.com/

『 某ファミリーごっこ 』　怒羅悪

実際はナイトバグファミリーなんでしょうけど、語呂の良さでにリグルスファミリーになりました。
ホラーネタについて尋ねたら、某ファミリーと答えてくれた友人に全力で感謝。配役は凄く適当ですｗ
そして描き終えてみると全然ホラーじゃありませんねｗ それでは、変なネタ失礼しました。

リグると! ホラー

描いたひと：ひどぅん

夏の風物詩。

本当にあった
怖い話。
かもしれない。

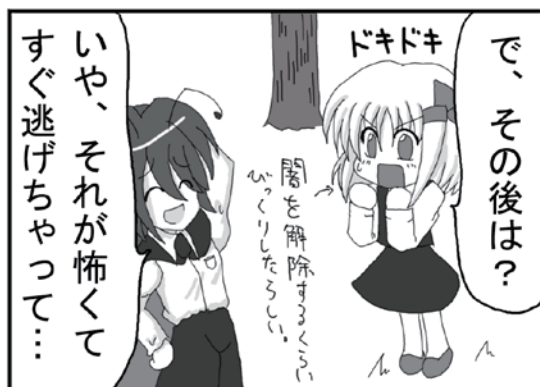
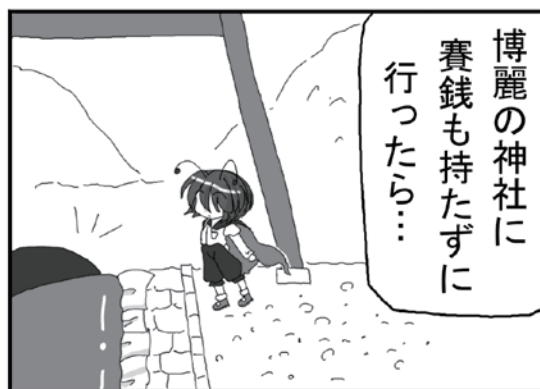
描いた人
草加あおい

0(ゼロ)円。

そして誰も居なくなった。

ごめんなさい…

Parasitoid

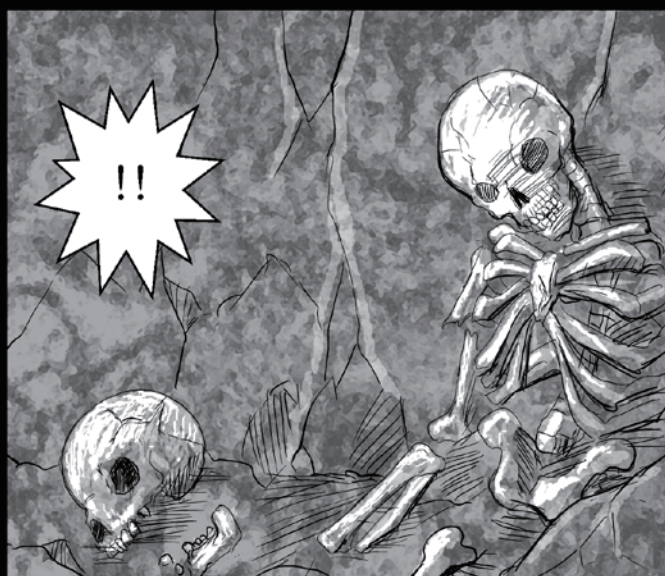
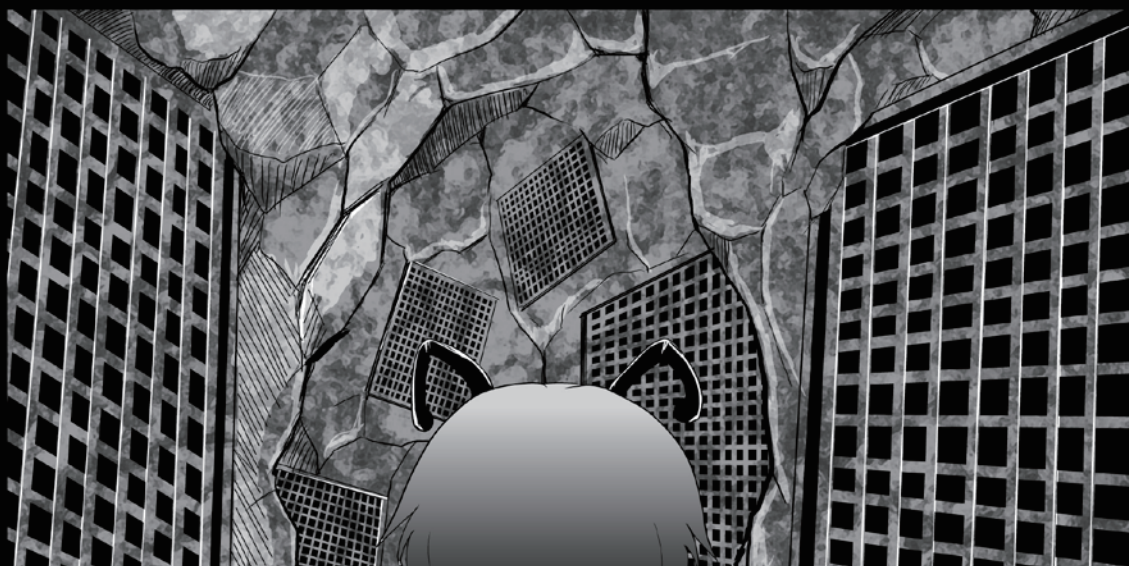
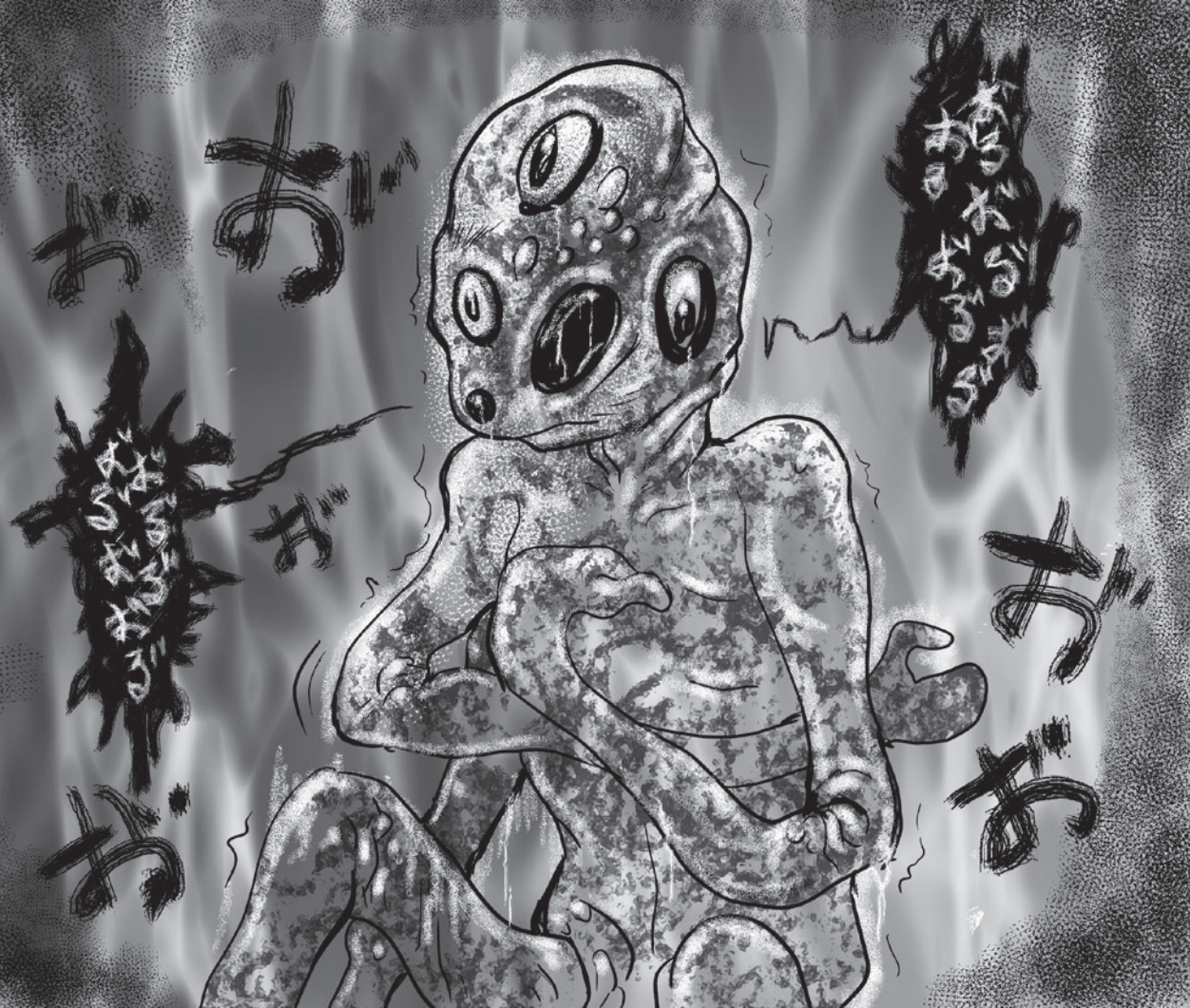
by　やにたま

『蠱毒』って言うものがある。
毒蟲を何種類も壷に詰め、
最後に残った一匹が
強力な毒を持つ。
それを呪術等に使うと
言うものだ。

威力は兎も角、される側の蟲は
たまったものじゃない。
風の噂に蠱毒を専門に使う
魔法使いがいると聞き、
何としても止めさせる為、
棲家だと言う場所へと
辿りついた。

ところがまるで人の気配が無い。
どうやら相当古い情報だった様で
魔法使いの姿は影も形も無かった。
見つけたのは棲家の影にあった
実験用の洞窟ぐらい。

手ぶらで帰るのも癪なので、
私は軽い気持ちで
そこに踏み込んだ。

!!
檻……だよね
なんでこんなに？
人間の屍自体はそう珍しいものじゃない。
ただ、明らかに自然死ではないいし、何より……
人間以外まで混じっていたのだ。

良く見れば人外のものの方が多いくらいじゃ…
ここの主は一体『何を』作ろうとしていたんだ？
…こっちは通れるかな？
穴……？
何だここ……壁一面に札やら文字やら……
底の方には尋常じゃない妖怪の骸が転がってるし…
ぞわっ
……!?
真ん中のあれ…動いて…？

何処をどう帰った物か曖昧だが
私は其処から逃げおおせた。
そこの主が何をもって蠱毒を
作ろうとしていたのか、
今はもう解からない。
ひっ!!
だがあれは恐らく、
まだあそこにいるのだ。

本当は怖い秘封倶楽部

羅外

ひっひっほー。

子供を驚かす程度の物語

著者：泥田んぼ

老人は街道で瓜を売っていた。裏の小川で冷やした瓜を８つに切って、饅頭の半分ほどの値段で売っている。

普段なら旅人や畑から戻ってくる若い衆相手にそこそこな数が売れるものの、今日は今年の夏でもとびっきりと言っていいほどの暑さの所為か、まず人が通らない。

まぁこういう日もある。愚痴も言うまい。もっとも、愚痴も言えないほど、彼自身が暑さに参っているというのもある。道まで大きく葉を突き出した木の根元、木陰の中にゴザを敷き、竹筒に詰めた緑茶をちびりちびりやりながら趣味の詰将棋をして、このうだるような暑気を無視するのもいい加減限界であった。

（客も来ない……。帰るか）

そう何度も考えたが、その度に、もう少ししたら誰か通るかもしれないと思いなおしては、結局ずっと家に戻るタイミングを逃していた。

気づけばもう夕刻。道の向こうに夕日、朱色に染まった空と雲。アキアカネの群れがヒョイヒョイと飛んでいる。

裏でチョロチョロ流れる小川からひっそりと立ち上る涼気が気持ちいい。遠くで幽かにひぐらしが鳴き始めた。

（やれやれ……結局客が来ないまま日が暮れちまうわい）

ひんやりと忍び寄る夜の気配は一日分の熱気で疲れ切った老体にも心地よかったが、暗くなりすぎるとこの辺りにも妖怪が出る。あまりゆっくりするわけにもいかなかった。

最近、朝と夕とに痛む腰を庇いながら老人がよっこらせと立ち上がろうとした時、遠くから誰か歩いてくる気配があった。

楽しげに笑いあいながら歩いてくるのは、３人の子供たち。

子供が出歩くにはもう遅い時分である。早く家に帰らなければ良くないものにかどわかされるだろう。老人は声をかけた。

「おぅ。坊主に嬢ちゃん。もう日が暮れるぞ。ウチに帰る所かい？」

子供たちが言うには、お使いから帰る途中だと言う。

しかし、聞けば帰る行先は老人の住む村とは反対側、しかも三つ先の集落だとか。日が暮れる前に着けるかどうかというところだろう。明るいうちに確実に着く為にはもっと早く帰らなければならないのに、さては寄り道でもして時間を忘れたか。

（駄目じゃのう。こういうのは、親がよく言って聞かせなんだと）

おっかさんのお使いかい、と聞くとウウンと首を振った。なんでもお世話になっている寺子屋の先生、上白沢の先生からの頼まれごとだとか。

（上白沢の先生か……）

半分妖怪の血を引き、人にあらざる力と長命を誇るも、その力を人を守る為だけに振るう少女。

なんでも歴史を司る力があるとかで、この世のことで知らないことはなく、その知識を生かして寺子屋も開いている。

　ここらの村々では知らぬ者のないほど慕われている人物である。老人自身も、かつては彼女の寺子屋で色々と教わったものである。

（そう……学問以外にも、あの乳や尻にはお世話になったものじゃ）

　今でも瞼の裏に焼きついているあの輝かしきもの達の思い出に浸りながら、ふと老人はちょっとした悪戯心を起こした。

　こんな時間に外を出歩く子供たちを驚かす、ほんの少しの悪戯を。

「どれ。ひとつ昔話をしてやろう」

　ポン、と膝を叩いた老人に、昔話？　と子供たちは首をかしげる。

「そうじゃ。儂がまだお前さん達よりも小さかったくらいの話じゃ。……少し長くなるから、この瓜でも食べてなさい。ああ、お代はいいよ。どうせ今日のあまりもんじゃあ」

　そう言って水から引き揚げた瓜に、老人は手もとの鉈をざっくりと振り下ろした。

＋—＋—＋—＋

　昔むかしの、ある日のこと。

　その日、彼は一人っきりで遊んでいた。

　蝉を追うのにすっかり夢中になって時間が経つのを忘れた。気づけば森の奥深くまで入りこみ、おまけに辺りはすっかり暗くなってしまっていた。

『遅くまで遊んでると、妖怪に食べられちゃうわよ』

　母親の声が耳にこだまする。

　慌てて家に帰ろうとするも時既に遅く、暗闇の中、迷子になってしまっていた。

　道は細く、周りの木々の影がグンと伸びて襲ってくるかのよう。幸い月が出ていたが、足元を確認するのがやっと。家に戻るのは到底無理だと、子供の頭でも分かった。

　仕方ないので木のウロを見つけ、そこで朝が来るのを待つことにした。下手に動き回るよりはマシだろう。

　木のウロはちょうど子供一人がすっぽり収まる大きさだった。

　体を落ち着けると今度は腹が減ってきた。ぐぅと盛大に主張する空きっ腹が恨めしいやら情けないやら。涙を飲んで我慢する。

　ええい、寝てしまえ。寝れば腹が減ったことも忘れられるだろう。

　びゅうぅと吹く風。

　音ばかりでウロの中までは入ってこなかったが、まるで狼の吐息のように恐ろしく感じられた。

　体をぎゅっと丸めて、怖いものを見ないように固く目を瞑った。

　——声が聞こえた気がして、目を開けた。

　ウロの外。覗きこんでくる影。

　まっ黒い影……っ。

　吃驚して声も出せずに固まっていると、影が口を開いた。

　——こんなところにいたら、食べられちゃうよ。

　——真っ暗な妖怪がやって来て、頭からがぶりとキミを食べちゃうよ。

　じゃぁどうすればいいの？　彼は泣きべそをかきながら聞いた。

　——しょうがないなぁ。

　——里まで案内してあげる。

　——ついておいで。

　そう言ってそっと差し出された手は白くて小さくて、そしてとても温かかった……。

　手を引かれて夜の森を歩く。

　リーリーと虫の声。

　最初はやっと家に帰れる、と安心感でいっぱいだったのだけれど、そのうちに、彼はある考えに気づいてしまった。

　こいつが妖怪じゃないの。

　真っ黒なマント。

　見た事のない色の髪。

　そもそも普通の人間が、こんな時間に森の中にいるだろうか。

　こいつが妖怪じゃないの。きっとそうだ。

　ボクを自分の巣に連れ帰って頭からがぶりと食べる気なんだ。

　もしかしたら鍋でグツグツ煮られちゃうかもしれない。でっかい包丁でザクザク切られちゃうかもしれない。

　肺がバクバクいっている。手が汗ばんでいる気がした。こわい。怖いよ。

道が分かれるところで手を振り払い逃げ出した。真っ暗な道。転びながら逃げ出した。
——あ。どうしたのっ。
まっ黒な影が追ってくる。
——止まって。そっちは危ないよ。
優しそうな声。本気で心配しているような声。ザザザと音を立てて追ってくる。
アッチ行け！
だまされないぞっ。
そう叫んで石を投げつけた。無我夢中だったけれど、当たった。
——痛っ。
追ってくる音が止まった。でもまたすぐにザザザと追ってくる。
逃げながら何度も投げた。
あっちへ行けっ。妖怪っ。
怖くて怖くて。止まったら肩をガシリと掴まれてしまいそうで。
あっちへ行けっ。
さっさと行っちゃえっっ。
怖くて怖くて。泣きながら、逃げながら、石を投げた。
気づいたら、いつの間にか黒い影はもう追ってこなくなった。
……泣き疲れて走り疲れて、すっかりぐったりしたままトボトボと森を歩いていた。
道なんてもう分からない。どっちへ行っても、あの黒い影がばぁっっと姿を現しそうで。でも立ち止まることもできなくて、棒みたいになってしまった足を引きずりながら人のいない真っ暗な森を歩く。
月も見えなくなってしまって、星の下、夜の虫たちが鳴いていた。すごく心細かった。
……怖いよ。さびしぃよぅ。
考え出すと、またポロポロと涙が零れた。だけど拭う力も残っていなかった。
……ふと、目の前を一匹のホタルが横切った。と、思ったらまたフヨフヨと戻ってくる。
その灯りは、ずっと暗闇の中を走っていた目にはとても明るく感じられた。ゆらり揺れるその灯を涙の痕の残る目で追う。
揺れる蛍の光。
まるで誘うようにお尻を揺らして。
フヨフヨ。
まるで誘うようにお尻を揺らして。
フヨフヨ。
まるで、ついて来いと言っているように。
気づけば、そのホタルに導かれる方向へ足を踏み出していた。
真っ暗な森の道。
小さな光に導かれて行く。
やがていつの間にか、里に出た。

+—+—+—+

「里じゃぁ大人たちが篝火たいてな。上白沢の先生まで呼んで、これから山狩りしようかっていうトコじゃった。そこに儂がひょっこり帰って来て、みんなびっくら驚くやら喜ぶやら。親父とお袋なんかぴょーんとすっ飛んできて儂のことを抱きしめて泣きながら大喜び。その腕の中で、儂も泣きながら謝ったけどなぁ。もう遅くまで遊びませんってな。あんな怖い思いをしたのは、生まれてこの歳まで、あれっきりじゃ」
そう締めくくって、老人は子供たちを眺め渡す。
「どうじゃ？　わかったか。遅くまで遊んでこんなトコ歩いてると、真っ黒な妖怪に攫われちまうぞい。ん？　どうしたどうした坊主。そんな顔して。見た所、嬢ちゃん達の方はまるで怖がっちゃくれてないようだけどのぅ。男がそんなことぢゃ情けないぞい。わっはっは」

+—+—+—+

老人と別れて、三人はまたテクテクと歩いていた。
「面白いお爺さんだったね！」
とミスティア。
「おみやげにもう一つずつ、瓜くれたしねー」
三人分の瓜を齧りながらルーミア。
「私たちが妖怪だってことには気づいてなかったみたいだけどね」
クスクス笑うミスティアは、隣のリグルが元気がないことに気付いた。
「どうしたの？　リグル。お腹でも痛くなっちゃった？」
「瓜の食べすぎなのかー？」

「あ、さては気にしてるな？」
「なにをー？」
「くすくす。だって結局お爺さん、最後までリグルのこと、男の子だと思ってたみたいだもんね」
「あー。坊主ー、って言ってたもんねー」
　ねー。アハハハハ、と笑い合うミスティアとルーミアに、リグルもようやく顔を上げる。さすがに苦笑いだったけれど。
「……ん、そうじゃないよ」
「じゃぁ何よ？」
「ナニナニー？？」
「秘密」
「あ。ずるいっ」
「ずるっこずるっこー」
　騒ぐ二人を適当にかわしながら、リグルは声に出さずに呟く。
　ただちょっと、懐かしい思い出をね。
　それは、昔むかしの、ある夜のできごと。
　あまりにも昔すぎて、自分でもとうに忘れていたのだけれど。迷子の少年と蛍の妖怪の物語は、懐かしくもあり痛くもある。人間と妖怪とですれ違いばかりだったけれど。それでも、それは決して悪いことばかりではないようだとリグルは思った。
　一匹のホタルが、ぽたりとリグルの肩にとまった。

（終）

〈作者コメント〉

　リグル（秘密ひみつ。だってルーミアの食事を邪魔しちゃったんだもの）■ホラー……にしてはあまり怖くなりませんでした。まぁ妖怪なのに怖くないのが（むしろ愛苦しいというか可愛すぎるのが）リグルなわけで、万事ＯＫですよね？　最後に。リグルは女の子ですよ。ですよ。

お化けと言ったらあの人（?）しか浮かばなかったよ

著者：社 蛍夜

真っ暗闇の中に一つの建物と一人の少女がいた。
少女は緑の髪にマント、頭には触覚という変わった風貌だ。
ボーっとしていた少女は無言で左右を見渡している。
少女の目の前に、いや建物の前に少女がいる。建物には『お化け屋敷』と書かれた看板がかかっている、見た目もまんまお化け屋敷だ。だが扉は閉まっている。
この状況ん見て悩み始めた少女。
さて、それでは少女に話しかけてみましょうか。
『こんにちは』
「ふぇ⁉　ど、どこから声が？」
『あぁ、目の前のお化け屋敷にあるスピーカーですよ』
「あ、あぁ。それね」
そう言うと目の前の建物に掛ってる看板の、右横にあるスピーカーを見た。
『では、名前を教えてもらえますかね？』
「私？リグルよ、リグル・ナイトバグ」
『リグルさんですね。では、これからチャレンジャーと呼ばせてもらいます』
「名乗った意味無いじゃん！　それにチャレンジャーって何⁉」
『これからこのお化け屋敷に挑戦してもらうのでそう読んだのですが、嫌ですかね？』
「いや、そうではなくてですね、いきなりこんな所に居て訳分からないのに・・・って、そういえば此処は何処なんですか⁉　あなたは誰なんですか⁉　私はどうやってここに来たんですか！⁉」
『秘密です』
一言であっさりと切ったのがショックなのか、愕然としている。
「なっ、い・・・いくらなんでも一つくらい教えてくれてもいいじゃないですか！」
『キマリデスカラ』
「何故棒読み⁉」
『教えられないものは教えられないですからねぇ。まぁ、せめて帰る方法を教えましょう』
「・・・帰る方法？　なんですか」
『このお化け屋敷を出口まで行くことです』
「え、それだけ？」
『それだけ』
「・・・しかたない、入ればいいんでしょ。入れば」
『その通りです、挑戦しますか？』
「挑戦するわよ、早く開けて」
『了解しました。ではどうぞ』
私はそういうと遠隔操作でドアが開けた。建物の中は一本の通路が延々と続いているのが見えるだけだ。
「・・・よし」
リグルはそう呟くと、お化け屋敷へと入っていった。私はそれを見計らい、扉を閉めると同時にこう言う。
『それでは逝ってらっしゃい』
「えっ⁉　字がちが　」

言いきる前にドアがしまり、声が遮られた。では、建物の中をモニターに写しますか。
　モニターを切り替えた時、リグルはドアが開けようと頑張っていた。
　さて、ドアを壊されては堪りません。また話しかけましょう。
『そのドアは開きませんよ』
　突然の声に一瞬ビクっとしたようだが、すぐに冷静になったのか館内放送用の壁についているスピーカーを見つけ、話しかけてきた。
「何なんですか！　急にドアを閉めるなんて！」
『決まりなので』
「決まりって何のですか⁉　さっきも同じような事、言いましたよね！」
『ホラー的な演出（と称した誤魔化し）です』
「演出・・・ですか？」
『えぇ、このスピーカーも決まった時にしか使わないルールなので、そろそろ切りますよ』
「え⁉　ちょ　　」
　スピーカーからブツンッ、という音が聞こえた。あらかさまにスピーカーを切った事が分かる。
　少しの間茫然としていたリグルは、トボトボと歩き始めた。
　1分程歩いていたリグルは、目の前の装飾が変わっている事に気付き、足を止める。リグルは（どこかで見たような装飾・・・）と思ったようだが、思い出せないようだ。
　それでは決まりなので話しかけますか。
『1分ぶりですね』
「・・・この先はどうなってるのですか？」
『そうですね、ここは・・・命を賭けます』
「へぇ、いの　」
　と途中まで言ったが、表情が硬くなる。そして
「命！⁉　何なんですか！ここは‼　お化け屋敷じゃないのですか！⁉」
『えぇ、お化け屋敷です。ついでに言うとこのトラップ一つで終わりです。さらに言うと、誰かさんが書くのが面倒だから一つになった訳では無い・・・かもしれません』
「うわ、なんという手抜き」
『誰かさん曰く「本編に力を入れたいから、時間作りたい」だそうです』
「友達と最近始めた宴やって時間がｎａ　」
『それ以上は禁句・・・嘘ではないしいいじゃないか。だそうです』
「あぁ・・・そう、とりあえずここを越えれば帰れるのね」
『その通りです』
「じゃあ行くわ、トラップなんか気にしてたら進めなさそうだしね」
『わかりました。お気をつけて』

～以下リグル視点～

そうアイツは言うと、またスピーカーからブツンッ、という音が聞こえた。
　その音を聞いた私は前を見据えた。前に見えるその空間に怖くなったのか、汗が垂れ、唾を飲む音さえ聞こえた。
　そんな状況が怖くなり、直ぐに進もうとした。走って抜ければ大丈夫だ。そう思って。
　そしてその変わった通路へと入った。
　聞こえるのは自分の足音と息遣いだけ。他は聞こえない。
　なんだ、大丈夫じゃないか、何が命を賭けるん
　そこまで思った私は前方に見えた影に驚き足を止めた。
　何だ？　アレは。
　そう思いながら見ていたら、カゲがだんだんと近づいて来ている事に気付いた。
　カゲはだんだんと人の形になり、ゆっくりと近づいてくる。
　そして、その人影を目を凝らして見た。
　見ただけのはずなのに、体が勝手に逃げ出していた。
　考えようにも怖いという考えしか浮かばない。
　ひえぇぇ、何で私はこんな目に遇っているのだ？無理だ、考えている暇がない。
　とにかくここから逃げないと、そう思って足に入れた力を増やす。
　グングンと進む。変わった装飾の通路の終わりが見えた。終わりが見えたはずなのに、元の通路が見えない。

壁があり、どう見ても行き止まりだ。何故⁉　さっきまでは違う通路と繋がってたはずなのに！
　そう思っていたら背筋に寒気が走る。後ろを振り向く事すら怖い。
　意を決して振り返った私は目の前にいたお化けを見た途端、声が出なくなった。
　凄い音と怪しい笑顔の目立つお化け。そして最後に聞いた言葉が
「いただきます」

※※※

「ぅわ‼」
　がばっと起き上った私は、いつもの私の布団で寝ていた。
　服がベタベタする、寝汗が酷い。余程怖い夢でも見たのだろうか。
　思い出そうとする。が、怖いという事しか浮かばないので止めた。
「うぅ、シャワーでも浴びるか」

（終）

〈作者コメント〉
　やあ。夢落ちに定評がある作者（自称）だよ。
　テーマ特集では本性出したんよ！な勢いなので同姓同名の別人じゃね？と思った方、残念ながらイメージ崩してください。
　今回はホラーと言う事なので、リグルに「ひえぇ」と言わせてみたかった！という事でこのｓｓになりました（オイ
　さて、あの後お腹の鳴っていて、獲物を捕まえた喜びの笑みを見せていた怖い幽霊に、リグルが何をどう食べられたかは、読者にお任せしますね。では

紅魔館七不思議

著者：くろと

暗く昏い場所。
新書や古書の匂いで満たされた紅魔館の大図書館だ。
本の為にあるこの空間では、灯りは細く薄い。
そこでリグルとリリカは、紅い髪質の司書から説明を受けていた。
「古書などは傷まないよう丁寧に扱ってください」
紅い髪質の小悪魔はニコニコとしている。
それが逆にリグルを不安にさせる。
「私はこれで失礼します。後はお願いします」
紅い髪質の女性は会釈し、何処かへと姿をくらました。
取り残された二人は、
「……始めよっか」
「えー、面倒」
床に散らばっている本の整理を始めた。

□

白黒の魔法使いに、面白い事がある。と言われてホイホイ付いて行ったのが間違いだった。
彼女は派手に弾幕を散りばめ、目当ての魔道書を強奪し、リグルとリリカを囮にして逃げた。
瀟洒な従者に取り押さえられて事情を説明するも、解放はされなかった。
——やったことの責任はとりなさい。
それから一時間、リグルは黙々と図書整理をしている。

□

「あー、疲れたー」
「いや、さっきから何もしてないじゃん。少し手伝ってよ。アンタのほうが悪乗りしてたんだし」
まるでやる気が感じられないのは、プリズムリバー姉妹の三女リリカ・プリズムリバーだ。
彼女は自身とキーボードと雑誌を宙に浮かしている。
ペラペラと捲られるのは一昔前に廃刊となった音楽雑誌だった。
「ねぇ、聞いてる？」
「ん。聴いてるよ？」
言葉のニュアンスが違う気がした。
やがてリリカは、読み終わったのか、雑誌をポルターガイストで本棚まで飛ばす。
雑誌はポスン、と本棚に入った。
一つ、言わなければならない。
「リリカ」
「なに？」
「本棚違う」
その本棚は分厚い百科事典が並んでおり、あきらかに頁の薄い雑誌が収まる場所ではない。
「大した問題じゃないよ。ほらそこ」

リリカが視線で示したのは、本で構成された山だ。
「塵も積もれば山になる。本も積もると山になる。つまり、どちらも要らないゴミの山」
　リリカは欠点がある論証を語り、他の音楽関連の著作物を読み始めた。
　手伝う意思が全く感じられない。
　はぁ、と溜め息を零し、リグルは先ほどの音楽雑誌を本棚から取り出す。
「……そういえば『大図書館の死にたがり』って知ってる？」
　リリカがポツリと呟いた。
　知らない。と応えて聞き耳を立てる。
「近ごろ妖精たちの間で話題になってるんだけど、この大図書館で働くと死ぬらしいよ？」
　思わず音楽雑誌を取りこぼした。
　リリカがクスクスと笑う。
「イメージ補強に弾く？　怖いやつ」
「要らない。それで？」
「噂だと紅魔館で働いてる妖精が何人も死んでてね。それも大図書館の仕事に従事した者ばかり」
　リリカはあいも変わらず楽しそうに説明していた。
　その態度から一つの仮説を打ち出す。
「もしかして私を怖がらそうとしてる？」
　するとリリカは、まさか、とわざとらしく驚いた。
「私は騒霊だよ？　その必要がない。私達は言葉じゃなくて騒音で怖がらす。だいたいリグルは妖怪じゃない」
「それは……まぁ、そうだね」
　確かに、必要性は感じられない。
　リグルは落とした音楽雑誌を拾い、各種専門誌などが収まっている本棚に向かう。
「だけど、大図書館で働いた妖精でも死ぬのと死なないのに別れている。それは、ちょっとした仕事熱心で別れるらしくてね？」
「ちょっとした仕事熱心？」
　クスクス笑うリリカを尻目に、リグルは音楽雑誌を本棚に収める。
「『間違った本棚にある本を、正しい本棚に収めなおした』妖精が死ぬんだってさ」
「へぇー…………え？」
　手が音楽雑誌から離れた。
「それって……」
　リグルは今、『間違った本棚に収められた音楽雑誌を、所定の本棚に収めなおした』のだ。
「うん。今、リグルの様なことをした妖精が死ぬんだよ」
　青ざめるリグルに反比例するかのように、リリカは清清しい表情をしていた。

□

　開始から二時間経った。
　空気が重い。
　もちろん、それは幻覚だ。しかし、リグルにとっては本当のことだ。
「リリカもどこかに消えたし……」
　音楽に関する書物を読み漁っていたリリカはいつの間にか忽然と消えていた。
　ふと、体が重くなった。
　肩に一人分の体重が乗っている。
「リリカ？」
　と後ろを振り向こうとして、
「ア……」
　気付く、騒霊に重量を感じられるほどの重みは無いことに。
　では、肩に感じている重みは何か。
　冷たいものが背筋を駆け上がり、額から冷や汗が流れ出した。
　（見れば分かる）
　そうだ。見れば分かる。首を僅かに傾ければ分かる。
　だが、動かない。
　恐怖とやらに硬直したのか、首が動かない。
　それから数分とも数時間とも感じられる時間が過ぎて、肩の重みが無くなった。
　勇気を振り絞って後ろを向いた。
「……だよね。誰も居ないよね」
　自分に呆れたように振り向いたまま、片付けていた本に手を伸ばした。
　それは、しっとりとした生ぬるい感触だった。

本棚に伸ばした自分の手が、その手首が、『誰かの手』に掴まれていた。
忘れかけた冷たいものが一気に体を支配し、心臓が高鳴りだす。
「リ、リリカ……さん？」
思わずさん付けで呼んでいたが、返事が無い。
だいたい、騒霊であるリリカでは体温など考えられない。
その手を離そうと、手首を揺らす。
「…………………」
しかし、掴んだ手は力強く、離れない。
「ね、ねぇ……、リリカじゃないならパチュリー？」
大図書館に入り浸っている本の虫だ。ただ、彼女が自分の手を掴むとは考えられない。
「それともメイド長か、司書さん？」
それも違う気がした。掴んでいる手は自分と同じくらいのサイズ、あの二人は自分よりも大きいはずだ。

『……ネぇ』

声を、掛けられた。
それは舌足らずなソプラノの声音で、リグルに喋りかける。
『こっチ　をみてヨ』
そっちを向かないといけない気がした。
脳が警鐘を鳴らし始める。
見てはいけない。という警鐘だ。
『ミてよ、見てヨ、みテよ、ミテよ、ミてよ、ミてヨ、みテよ、見てよ、ミてよ、見テよ、みテよ、ミテよ、ミてよ！』
首の角度を傾げる。僅かに少し、僅かに数センチだ。
それだけで、視界に、白い手が映った。
さらに角度を傾げれば、そっちを向いた。

そして…………みた。

□

「フラン？　最近、見かけないと思ったら、こんなところでなにをして……？」
館主がフランドールとリリカを咎めたのは、東雲が眩しい時刻だった。
また気絶していたリグルの顔は、妖精メイドらのラクガキ対象となっていた。

（終）

〈作者コメント〉
ホラーは難しい。三回ほど投稿しましたが、三回とも気絶しています。どうしてだろう？

夏の一夜

著者：夢宮

今も息絶えそうな虫の妖怪がいました。その異形から特に子供などから忌避されていた妖怪でした。でもその妖怪は人のことが好きでした。子供たちのことが好きでした。

　子供たちと遊ぶ姿をいつも想い描いていました。

　好きだからこそ、今にも息絶えようとする姿を見せたくなかったのです。きっと自分を見たら子供たちが怯えてしまうから。

　森の奥でひっそりと逝きたいのだ、と。

　それがその虫の妖怪のささやかな願いでした。

　いぶかしげな声が部屋の中からする。

「肝試し？」

「ああ。肝試しだ」

　声の主はリグル・ナイトバグ。応える声は上白沢慧音のものだった。

「あの森で？」

「うむ。あの森でだ」

　特に込み入った事情があるわけではない。人里に呼び出したリグルに、慧音がとある提案をしたのだ。

　曰く——

「最近の暑さで子供たちも結構疲れているみたいでな。一つ納涼肝試しでもやろうかと思うんだ。それをお前の住処がある森でやりたくてな」

　とのこと。

「それって、里の中じゃ駄目なの？」

「それが、子供たちは里の中をほとんど探検してしまっていてな。いまさら里でやっても面白さがないんだ」

　好奇心旺盛な年頃の子どもたち。その行動力は計り知れないものがある。少なくとも、慧音を悩ませるくらいにはあるのだ。

「けど、それにしたってもうちょっと安全なところがありそうなんだけど」

「安全性ならリグルが協力してくれれば大丈夫だと思うんだが。虫たちを使って危険を知らせてくれれば、あとは私が子供たちを守りながら里に連れて帰るつもりだ」

　リグルは少し嫌そうに言葉を返す。

「けど私だってそんなに万能じゃないし、子供たちにもしものことがあったりしたら」

「それについては私が全ての責任を負うつもりだ」

　それに対して慧音も譲ることはない。

「この通りだ。協力してくれないか」

　ついには深く頭を下げてしまった。これにはリグルの方が戸惑ってしまう。

「え、ちょっと」

「頼む」

　それからしばらくの間、リグルと慧音はなんだかよくわからない戦いを繰り広げていた。

　いつもならきっとすぐに了承していたであろうこの提案。それを断ろうとするリグルには、一応きちんとした事情がある。

しかし慧音の頼みを断りきることができずに、結局リグルの方が折れて肝試しに協力することを約束するのだった。

日が沈み、月が昇って輝く頃。
待ち合わせの場所に五人ほどの子供を連れた慧音がいた。
「今日の肝試しを手伝ってくれるリグルお姉さんだ。皆、ちゃんと挨拶するんだぞ」
『リグルおねえちゃん、よろしくおねがいします』
「あ……どうも」
お姉ちゃんと呼ばれてまんざらでもなさそうなリグル。頭をぽりぽりかきながら、少し照れたような表情で子供たちに応えた。
そんなリグルと子供たちを見て、少し頬を緩ませながら慧音が告げた。
「よし。じゃあ、さっそく出発しようか」
『はーい』
肝試しへの期待だろうか。子供たち五人分の声は、とても元気の良いものだった。

ザクザクと、葉っぱや草を踏みしめながら夜の森を行く。
りーん、りーん。ぶーん、ぶーん。ぷ～～ん。
様々な虫たちの羽根音がする。
灯りは、慧音の持っているランプのみだ。
けれども、そんなことを意に介すこともなく、子供たちは元気に喋り続けている。
「ねえねえ。お化け出るかなあ」
「はーか。出るんなら妖怪だろ」
「ぼくじいちゃんに聞いたことある。森の中には妖怪がいーっぱいいるって」
「でもわたし、妖怪さん見てみたい」
「おれもおれも」
子供たちはみな守られてきた。慧音という守護者によって。あるいは、大人いう頼りになる者達によって。
妖怪を見たことはあるだろう。けれども、それは害がないものばかりだったはずだ。
だから今、こうして楽しそうにおしゃべりをしているのだろう。
好奇心は、未知を餌にして大きくなっていくのだから。
「…………」
そんな子供たち五人を、リグルは少しうつむきがちな表情で見守っていた。

りーりりん、りーりりん。ぶーんぶーんぶーん、ぶーんぶーんぶーん。ぷ～～～～ん。
バサッ、バサッ、バサッ。キャキャキャキャキャ。
森に生きる者達の立てる音が響く。羽根音かもしれないし、鳴き声かもしれない。
その異質な音は、暗い森とマッチして子供たちを不気味がらせるくらいには役に立っていた。
「ちょっと、こわいかも」
「なんだよ。おまえ、おくびょうだな」
「だ、だってぇ」
違和感や不気味さというのは、恐怖の前段階だ。
それは子供たちに、すくなからず伝染し始めていた。
「…………」
リグルは、何かを思うような表情で子供たち六人を見守っていた。

りーん、りーん、りーん、りーーーん。バサッ、バサバサ。
音が響く。不気味な音。子供たちの耳から脳へ。
ホォーゥ……ホォーゥ。グルルルルルゥルル。
さらに森を進んでいくと、子供たちもおしゃべりをする余裕はなくなってきたようだ。
お互いの服をつまみあって、できるだけ小さく固まろうとしている。
「……ぅぅ」
そんな子供たちを見ながら、それまで沈黙を保っていたリグルが口を開いた。
「ねえ、森の歌って知ってる？」
静かな声が、静かな空間に広がっていく。
子供たちは、不安そうな表情でリグルの方を向いた。
「ううん。聞いたこと、ないよ」
「なぁにそれ？」
それでもやはりまだ好奇心が残っているの

だろう。森の歌という言葉についての質問が飛び出してきた。
　リグルは応える。能面のような無表情で淡々と答える。
「この森にはね。一匹の強い妖怪が住んでいたんだ」
　気がつけば、六人の子供たちは歩みを止め、リグルの周りを囲むようにして話を聞いていた。
　慧音だけは苦笑しながら、もしもの時に備えて辺りの気配を探っていた。
「すごく強くて大きな妖怪でね。他の妖怪も人間も手が出せなかったんだって。けど、その妖怪はたくさん悪いことをしたせいで他の妖怪達を怒らせちゃったんだ。それでお仕置きされちゃった。倒すのは無理だったけど、封印するのはできたらしいの」
「博麗の巫女様みたいにですか？」
　子供の一人がそう問いかける。リグルは頷きながら、話を続ける。
「うん。そうだね。けど、巫女さんよりもっと強い妖怪たちが全力で作った封印なんだ。そのまま一生出られない封印。けどね」
　そこでいったん言葉を切って、間を置いてからまた続ける。
「その封印、出られはしないけど、外からは入れるんだ。だから、その妖怪は人間を封印の場所に誘い出して連れ込んでしまうんだ」
　子供たちは静かにリグルの話を聞いている。慧音はどこか感心したような表情でそれを見守っていた。
「それで、妖怪が人を誘い出すときには歌が聞こえるんだって。森全体が歌ってるみたいに聞こえるらしいの。歌声がどんどん大きくなって行って、最後には……」
「さ、最後には？」
「どうなるの？」
　不安そうな子供たちがリグルに問う。
「内緒」
　けれどもリグルは答えない。まるで不安をあおるかのように。

リーン、ブーン、キーキー、ガラガラ、ザアァァ、ホォーゥ。
いろんな音が響き渡る。子供たちの頭の中に、満ちるように響き渡る。
　音と音が混ざりあって、新しい音が生まれて。またその音と音が混ざりあって。

「ねえ、聞こえない？」
　リグルが言う。
「ほら、耳を澄ましてごらん」
　囁くように言う。
「こ、こわいよう」
「なんだよこわがり」
「で、でもぉ」
　子供たちは、怖がりながらも耳をすませた。聞こえないはずの音を拾おうとするかのように。
「ほぉら。聞こえた」
　そして、そんな中でかけられたリグルの言葉。
　不安をあおるには十分だったし、感受性豊かな子供たちには想像以上の効果があった。
「ヒッ!!」
　息をのむような悲鳴を最初の子供が上げる。
「き、聞こえた。何か、何か聞こえた!!」
　一人が聞こえればそれで十分だった。
「わ、わたしも聞こえた」
　二人目が、
「おれも」
　三人目が、
「ぼくも」
　四人目が、
「あたしも」
　五人目が、
「ぼくも」
　そして……。
　子供たちは次々にそう言った。伝染した恐怖が発症したかのようだ。
「あれ？」
　そんな子供たちを見て、どこかいたずらっぽい笑みを浮かべながらリグルが言う。
「あなたは、だあれ？」
『え？』
　ほんの一瞬の間だが、時間が止まったような感覚があった。
　みんながお互いの顔を見合わせあって、そして気づいた。

肝試しに来たのは五人のはずなのに。
　なぜかここには六人いることに。
「偽物は、だあれ？」
　けれども不思議なのだ。子供たちには誰が偽物なのかわからない。
　みんな最初からいたような気がしてしまうのだ。
「え、あれ？」
「なに、え？」
「どういうことなの？」
　子供たちは口々に問いかける。口調からは混乱と不安がありありと伝わってきた。
「うーん。私にもよくわからないけど。もしかしたら……」
　妙に真面目ぶった声で、リグルが子供たちに告げる。
「妖怪が、皆をさらいに来たのかもね」
　張りつめた糸が弾かれるように。
　子供たちの中の恐怖が一気に爆発した。
「ひぃっ、やだ、やだぁあ」
「は、はやくかえりたいよう」
「慧音先生ぇ、もう帰ろうよぉ」
　子供たちは口々にそう言って、慧音を頼る。
　慧音は、やれやれと言いたそうに肩をすくめてから、子供たちと向き合った。
「まったく、しょうがないな。ほら、皆ちゃんとついてきなさい。一緒に帰ろうか」
　そういって差し出した両手に、子供たちが飛び付いていく。もう子供たちには、誰が偽物なのかなんて関係なかった。ただ速く帰りたいという思いだけがあった。
「見ての通りだ。私はこのまま帰るが？」
　リグルの方を見てそう問いかける。
「うん。気をつけてね」
　リグルは片手をひらひらさせて、それに応える。
「そうか」
　礼はまた後日。
　そう言い残して、慧音と子供たちは帰っていった。

　残ったリグルは足を進める。森の奥の方へ。
「みんな、ありがとうね」
　そう呟くと、それにこたえるかのようにいくつもの虫の羽音が響き渡った。

　ザクザクと、道なき道を行き、ようやく開けた場所に出る。そこでは、一匹の妖怪が横たわっていた。
　カブトムシのような、セミのような、クワガタのような、蝶のような。
　さまざまな虫の特徴を持った妖怪だった。それはお世辞にも美しいとは言えない異形の姿でもあった。
「もうすぐ？」
　けれどもリグルは、その妖怪に話しかける。
「ああ。リグルさま。ありがとうございます」
　妖怪の声は弱々しくかすれていた。
「いいよ。そんなに大したことじゃないから」
　リグルと他の虫たちが、その妖怪を取り囲んでいる。
「おんなじ虫なんだから」

　今にも息絶えそうな虫の妖怪がいました。その異形から特に子供などから忌避されていた妖怪でした。でもその妖怪は人のことが好きでした。子供たちのことが好きでした。
　子供たちと遊ぶ姿をいつも想い描いていました。
　好きだからこそ、今にも息絶えようとする姿を見せたくなかったのです。きっと自分を見たら子供たちが怯えてしまうから。
　森の奥でひっそりと逝きたいのだ、と。
　それがその虫の妖怪のささやかな願いでした。

「なるほど。森の奥に子供たちを近づけたくなかったと、そういうわけか」
「そうよ」
　一晩明けて、リグルは再び慧音のもとを訪れていた。
「なんだ。素直に言ってくれれば肝試しの日をずらしたのに」
「あんまり言いふらすものでもないし。それに、いい肝試しになったと思うけどなあ」
　リグルが森で子供たちを驚かしたことと、

その理由について説明をしに来ていたのだ。
「確かに、効果は絶大だったぞ。子供たちはあの後怖くて寝付けなかったそうだ」
「ありゃりゃ」
　やり過ぎたかなあと首をひねる。そんなリグルに慧音は少し真面目な表情で問いかけた。
「ちなみに、里に戻った時には子供たちは五人だった。あの子たちも、誰がいなくなったのかを思い出せないそうだ」
「へえ」
「これはどういう方法でやったんだ?」
「うーん」
　リグルは、子供たちに見せたようないたずらっぽい表情で悩んでから、こう答えた。
「内緒」
「なに?」
「だから、内緒。もしかしたら、幻でも見たんじゃないかな」
「?」
　慧音は首をひねりながらいろいろ考えているようだ。
　それを見つめながら、リグルは柔らかくほほ笑んだ。

　ここは幻想郷。幻を想う郷なのだ。

（終）

〈作者コメント〉
　ホラー特集用なのに、あんまりホラーっぽくならなかったことに反省。怖いものとかは書くの本当に難しいですね。とりあえず読者の方々に「ああ、なるほど」って思ってもらえれば、作者的には合格ラインかなあと。

Illustrations of August
扉絵：草葉『ポグル』
ちょっと夏仕様

▶ 夏なので濡れてみました。■夏コミ2日目東ク-30bです。「O・M・T」
ボカロスペですが「リグルくれ」と仰って頂けば先着でグッズ無料配布予定。詳しくはpixivにて～

ホラーは無理でした.
初めて描いたリグルを再修正したのがこれ

▶ 今回も路線変更してたり・・・そして相変わらず線画ががｇ
友達に見せたら「ヒマワリの裏側描くやつは初めて見た」とか言われる始末。

▶ リグルへの愛がマッハで有頂天。可愛すぎるんだよこんちくしょう。

▸ 夏だ！　スク水だ！　スク水だ！　スク水だ！

リグルの挑戦ー後編

著者：壁々

夏もいよいよ本格化してきた。まぶしい日が差し、蝉の声に包まれる森の中。妖怪の山にそれなりに近い位置にあるため、普段は人気のない森なのだが、今日はにぎやかな声が聞こえる。里の寺子屋の子供たちの声—今日は遠足である。
「先生、みんな食べ終わりました。」
「よし、整列させてくれー霊夢、移動だ。起きろ！」
「…起きてたわよ。ちゃんと警戒してたわよ…」
「…嘘くさい…。」
上白沢慧音は疲れていた。子供の引率はもちろんだが、加えてまるで警戒しているように見えない霊夢のせいで気をもんでいたのだ。リグルが来るのは約束として取り付けているからいいのだが、予定外の妖怪に急襲される可能性もないわけではない。さらに気になるのは。
「…霊夢。ここ最近リグルを見たか？」
「見てないわね。まぁ、ここ最近はあんまり外回りしてないし…」
あの約束以降、全くリグルの姿を見ていないことである。３日ほど前に連絡をとろうとしたのだが、音沙汰がない。いったいどうしたのか—何かを企んでいるのか—それとも何かあったのか—。
気疲れと、考え事。その二つが慧音の警戒を薄めた。周りの異状に。ふっとやんだ蝉の声に。
最初に気づいたのは霊夢。その瞬間に霊夢のスイッチが入る。とっさに防御結界を展開するべく懐の符に手を伸ばす。次に敏感な子供と慧音が、上から迫る殺気に気づく。すべての子供が緊張と恐怖で身を固め、慧音が防御を展開しようとしたその時に。
結界壁が霊夢の頭上に完成し、それと同時にリグルのつま先が結界に突き刺さった。
「不意打ちとはね！」即座に霊夢は頭上の敵に向けて、札を放つ。しかし、それ以上に早く、結界を蹴った反動でリグルは上空に飛びあがっていた。反撃とばかりにリグルも攻撃を返す。
「蛍符『地上の彗星』！」
「産霊『ファーストピラミッド』！」
ちょうど慧音の防御壁が子供をかこう様に展開された。三角錐を形作る様に配置された霊体の防御はそう簡単に破れはしない。それを見て霊夢は一言
「子供達を任せたわよ！」
その言葉をおいて上空にリグルを追った。

——　一週間前。紫につれられてリグルがついた先には見渡す限り木々の緑が広がっていた。綺麗な緑ー綺麗すぎて、この世のものとは思えない。
「ここは冥界、白玉楼。死者の魂が逝きつく

場所。ここの庭なら広いから本気で弾幕を撃てる。」
　本当にこの世じゃなかった。
「あの…帰れる、のですよね…？」
「帰りたくないならいつでも言ってくれていいわよ。」
「結構です。」
　最大の問題はひとまず心配なかった。とりあえず安心したリグルは早速本題に入ろうとした。が

「で、どうすれば強くなれますか？」
「無理よ。」
　にべもない即答にリグルは一瞬世界の終わりが見えた気がした。
「…はい？」
「私は『勝てるようにする』と言ったわ。1週間そこらで『強くなれる』なら誰も苦労はしないわねぇ…。まぁ、私の式になるとか、方法はないわけではないけど、リグル・ナイトバグという個人を確実に失うわね。それでいいなら」
「結構ですっ！『勝てるように』してください！」
「そう。それなら…」

（上空に追ってきた霊夢、子供を守るために地上に残った慧音ー紫さんの言った通りの展開—）

『まずは不意打ち。これで決まればまぁ、苦労はないんだけど…霊夢のカンは反則気味な精度だから無理でしょうね。』
『そして、即座に上空に逃げつつ、慧音にむけて弾を撃ちなさい。万が一にも2対1にならないように、彼女を地上にしばりつける。当然、この段階での霊夢の反撃はなんとしてもかわすこと。』

上空で霊夢と相対するリグル。夏の強い日差しも、子供の声も、今の彼女達には気にならない。ただ、目の前の相手に—。息つまる、幻想のスペルカード戦の開始。
「先手必勝！　回蝶『バタフライスパイラル』！」
リグルから一斉に蝶が飛びだす。直線的に放たれた蝶はある程度進んだところから徐々に減速を始めた。このとき、霊夢にかすかな違和感。
（…？　リグルの弾幕らしくない…。いつものリグルのは…）
『あなたの弾幕は直線的すぎる。前を見ていればかわせるような弾幕では霊夢に勝てない。たとえば—こんな弾幕がいいんじゃない？』
　減速、減速、そして、停止へ。霊夢のまわりに蝶が停滞すると見せた時。
（…っ!?）

　蝶達は急に進路を曲げはじめ、急にリグルの元へと戻り始めた。すでに囲まれていた霊夢には後ろから蝶が殺到する。
（…これは…まさか…！）
　後ろからの蝶をかわしつつ霊夢がリグルのほうを向き直ると、リグルの周りに集まった蝶はリグルを中心として渦を描くように回転、加速。そしてその蝶達は再び霊夢のもとへ放たれた。
（…紫の二重黒死蝶のパクリ!?）
『この弾幕は蝶を使えばいいのだから、あなたならさしたる消費もなく使えるはず。』
『最初にこれを見せれば、霊夢はテンポが崩される。彼女も所詮人間である以上、動揺は必ず起きる。』
『それでも、すぐに体勢を立て直してくるはずだから—間髪いれずにこの弾幕でさらに動揺を誘いなさい。』

（魔法陣に力を目いっぱいためて—小さな虫を連続、大量、高速、直線射出——……よし！）
「光虫『ナイトバグランス』！」
（くっ…重ねて……!?　…ってこれは…！）
　リグルの宣言とともにいくつかの魔法陣が展開される。そこから射出されるのは鈍く光る、とぎれとぎれの光線のような高速の弾。
（…紫め…入れ知恵したな！　飛光虫ネストだ…！）
　札と針で反撃を試みる霊夢だが、光線と霊

力を込められた蝶に阻まれてなかなかリグルまでの道が開けない。
（くそ…仕方ないわね…）
――「いかに霊夢でも、このスペル２枚を撃ちぬく火力はない。かならず状況の打破のためにスペルを使う。」
　特訓開始から3日め。なんとか二重黒死蝶と飛光虫ネスト（のパクリ）を習得して、へとへとなリグルに紫は次のステップへの話を始めた。
「霊夢はこの段階で二つの思い込みをする。一つはあなたに入れ知恵しているのが私だけだということ」
「…違うんですか？」
「そしてもうひとつ、ネスト以外にあなたには発動直後に本体に襲いかかるタイプの弾幕がないはず―私の入れ知恵による習得を含めても―ということ。新しいスペルも一週間そこらで出来ることは稀だしね。」
「…」
「この二つを解決するためにも、わざわざ死んでもらってるのよ。」
（全部ぶち抜くなら―もっと力をためて―紫にも、リグルにも、速攻型の弾幕はもうない…！）
（頼むよ…これで決める！）
「舞蟲『彼岸誘蝶』！」
　宣言と同時に蝶がリグルから数体放たれる。それなりの速度で、旋回しながら霊夢へと接近。
（…？　この程度の攻撃を…今このタイミングで…？　…まぁいいわ、最大出力で全部吹き飛ばせてもらうわ、リグル―）
（あと少し…近づけば…）
　依然降り注ぐ光線をかわす霊夢に近づく蝶。その距離は着実に近づく。霊夢の周りの蝶を集めながら―
（……？　…二重黒死蝶の弾が極端に減ってる……）
（…!?　接近してくる蝶の妖力が膨れ上がってる！　…これは…やばい！）
　霊夢が「それ」に気づいたと同時に、彼岸誘蝶は真の力を発動。霊夢に近づきつつ大量の蝶をひきつれた蝶は、集めた蝶をすべて霊夢に対して放出。蝶の嵐を霊夢の周りに展開した。
「やった！　…!?」
　奇策がすべてはまった。蝶の嵐の発動を見て、リグルは勝利を確信した。しかしその直後。
　嵐の中心から爆音と光が起こる。神々しいまでの光は嵐を呑み込み、蝶の嵐を打ち消した。
「そんなっ…!?　あのタイミングでスペルを撃てるなんて…！」
　唖然とするリグルにむかって、光からいくつかのすさまじい霊力を持った光球が飛び出してきた。
（神霊『夢想封印』…ここまでの威力なの!?）
「っく！」
　とっさに飛行虫ネストの発射台の魔法陣を自らの前方に楯のように構える。再び爆音と光が今度はリグルを中心として起こる。
（危なかった…まさか幽々子のスワローテイルバタフライとはね…今まで、すべて蟲に関する弾幕とはいえ、よくここまで習得したもんだわ…。だけど、全部いっぱいいっぱいの発動だったようね、すべて撃ち砕けた…いける！）
　一気に勝負を決めるべく、霊夢は爆発の中心に向けて全速力で飛ぶ。
（かすかに妖力を感じる…爆発にあわせて見えないように弾を設置してあるわね？でもそんなものはー）
　まぶしい光が薄まると、そこにははたして、弾が配置されていた。しかし、弾の配置は甘く、リグルへの道が逆に見えるほどのもの。リグル自身は足もとに新たに精製されている魔法陣に手をついている。
（…もらった！）
　チャンスとばかり弾の壁の間に入り、一気にリグルとの間合いを詰め、まさにスペルを放たんとした時。

同時に、リグルが顔を上げた。しっかりと霊夢を見据えたその目には、あきらめも、恐怖もない。まだ勝負をあきらめていない目だった。

　特訓開始から6日目の昼。すべての段取りをマスターして、リグルは心身ともにぐったりとしていたが、心地よい充足感につつまれていた。これなら、ここまでやればきっと勝てると―

「ここまでやれば7割方勝てるわね。」

　紫の一言は意外な厳しさだった。

「…まだ、3割は負けますか?」

「あなたがミスらなくても、相手が反則的な強さだからね…奇策をすべて力と直感でねじ伏せてくる可能性は高いわ。ほら、立って」

　紫の作った隙間に手をかけて、リグルはゆっくり立ち上がりながら聞いた。

「…まだ何かを?」

「今からこの3割を埋めるための、最後の詰めとなるスペルを見に行くわよ、地獄まで」

「…ひぇぇ…」

　旧地獄跡地の上を飛びながら、紫は最後の策をリグルに授ける。

「霊夢はかっこよく決めようとする。それはつまり、遠距離からの一方的な射撃による撃墜ではなく、一撃必殺のスペルを直に叩き込もうとするはず。最後の決め技は、おそらく至近距離からの陰陽鬼神玉。近づいてくる霊夢をカウンターすることができれば最後の最後であなたが勝つ。」

「…至近距離戦を身につけるの?」

「あなたの真の力は、蟲を支配することではない。あなたの長所はあなた自身が蟲であったということ。小さな体躯に秘めた莫大な生命力と、純粋な怪力が、あなたの真の武器。だから、きっとこのスペルも…形だけでも、真似はできるんじゃない?」

　リグルの目を見た霊夢は、一瞬たじろいだ。そして、その一瞬で、すべてに気づいた。この弾の配置、相手の気迫、手に込められた渾身の妖力が何を意味するのか―

(ちょっ…!　まさか勇儀の三歩必殺!?　まずい…!　ぶち抜かれる!)

「うわあああああっ!」

　リグルの必殺の拳が、魔法陣を足場にして振りぬかれる。まっすぐ、霊夢に向けて。

「せんせー、さよーならー」

「ああ、気をつけて帰るんだぞー。…さて、霊夢?」

　夕暮れが綺麗に空を橙に染めたころ、慧音率いる寺子屋の遠足は解散となった。無事に「妖怪退治」も終わり、帰路の子供たちの話題はその激闘だけのようだった。

　いい遠足になったようでよかった、と子供たちの背中をみつつ、慧音は後ろにたつ霊夢に話しかけた。

「下から見上げる私の目にも何が起きたのかははっきり見えていなかった。むろん、子供達にも見えている状態ではなかっただろう。しかし…あの最後のリグルの一手。普通にはかわすことも受けることもできまい。何をした?」

「使うな、とは言われてたけど、亜空穴で後ろに回り込ませてもらったわ。正直、あの時は負けないようにするだけで必死だったから…下から見られてるか、とかは考えてなかった。侮ってたわよ…。」

「…まさか、ではあったよ。あんなに同時にスペルを展開するのは容易ではない。」

「前から少し思ってたのよね。あいつ、大半はこっちに向かってこないけど、すごい多く弾撃ってるなって。今回は、そのエネルギーを全部私に向けて撃つようにされてた。…紫のせいで、ね。」

「…やれやれ…とんだ助っ人につかれたものだな。…ところで霊夢?」

「何よ、私そろそろ帰って寝たいんだけど…」

「なぜ、紫は今回、リグルに肩入れしたんだろうな?」

「ああ…そんなことか。簡単よ。どうせ…」

　人里から離れた空き地。一週間前、慧音か

ら依頼を受けたまさにその場所で、リグルはボロボロになって横になっていた。過密日程の特訓に加えて、最後、霊夢の陰陽鬼神玉で吹き飛ばさたのだから無理はない。だが、リグルはすっきりとした気持ではあった。

「巫女に本気出させて満足…とか思ってないわよね？」

「…負けたから悔しくはあるけど…私には雲の上の存在だった巫女にあそこまで競った勝負ができて、楽しかったです。」

　いつのまにか後ろに立っていた紫の問いかけに、リグルは正直な気持ちを述べた。楽しかった。何よりもその気持ちが一番だった。

「今回、私は一時的に勝つためにスペルを貸した。所詮は他人の技なのだから、オリジナルより強くなることはあり得ないわ。あとはあなた次第―力の使い方も、スペルカードもね。」

「…紫さん、一つ聞いていいですか？」

「何？」

「なんで…ここまで私のことを見てくれたんですか？」

「ああ、そんなこと…。たいした理由じゃないわ。」

「私の」「霊夢の」

「焦るところが見たかった」」

「くらいの理由じゃない？」「だけよ。」

「ああ、そうそう。慧音からの報酬の話なんだけど。」

「あ、そうだった！　明日にでも、もらいに行こうかな…何にしよう…」

「これは私からの最後の助言。食糧にしなさい。」

「…なんでですか？」

「今日、幽々子と会ったんだけど、手伝ってくれたお礼に何が欲しいって聞いたら、『蛍っておいしそうよね』って言ってたわよ。代わりになるものを用意しておいたほうが多分いいと思うけど…」

「…………」

「まぁ、いいんじゃないかしら？　タダ働きでも。有意義な時間を過ごせたじゃない。」

「…ひぇぇぇ…」

　…世の中おいしいだけのことなんてない。

リグルの今回の教訓。

（終）

〈作者コメント〉

　このネタのきっかけは、「上位ボスに蝶弾使うやつ多いな」と、「季節外れのバタフライストームつえぇ」でした。

　え？三歩必殺？…ノリで…（マテ

　今回、わかりにくいところもあるかもしれません。質問は掲示板へ…。

静かな面持ちで、八雲藍は障子の前で正座をしていた。
　この先にあるのは、この家の主である八雲紫の部屋である。障子をある前に、紫の言葉を思い出す。
『藍。正装をして私の部屋に来なさい。なるべく早くね？』
　正装をして、というのはつまるところ外へ出かけることを指していた。これから何処かへ出かけるのだろうか。紫が昼頃に活動する、というのも珍しい。
　軽く咳払いをし、気を引き締める。正装をしている以上、八雲の式として恥ずかしい振る舞いは出来ないのだ。
「失礼いたします。八雲藍、準備が出来ましてにございます」
「ふふ、思っていたより早いわね。お入りなさい」
　紫の声に、藍は障子を開けて中に入る。中には正装に着替えた紫がいた。いつもならば、寝巻きであるワンピース姿で一日を過ごしている。それを着替えているということは、やはり出かけるということなのだろう。
「それで、今日は何処へお供するのでしょうか」
「まぁそう急かさないのよ。今日出かけるのは、貴方なのだから」
　はぁ、と藍の口からは気の抜けた返事が出てきた。
　てっきり、紫の付き添いだと思っていたばかりに拍子抜けしてしまった。胸の中にあった緊張が、少し緩む。
「気を抜かないように。私が行かないということは、貴方が責任者なのだからね。」
「あ、すみません」
　気の緩みを見抜かれ、ビクッと肩が震えた。ほんの少しだったのに、それを見抜かれてしまう辺り、式としてまだまだだなぁと心で自分を戒める。
「さて、藍。貴方に命を下すわ」
「はい、何なりと」
「この前の、蟲の騒動は覚えているわよね」
「蟲の……と言いますと、リグル・ナイトバグの件ですか」
　リグル・ナイトバグ。蟲の王女にして、蟲達の理解者である少女。今年に入り、その蟲達が力をつけ、不穏な動きを見せていたのだが、最近その蟲達がリグルを襲撃するという事件が起こっていた。
　確かに、リグルには蟲達の頂点という存在にしては、気が弱いところもあるし、実力的にも性格的にもまだまだ幼い面が目立つといえる。
　しかし、その事件の際に紫がリグルを支持することを宣言したことで、この件は終わりを迎えていたはずであった。八雲がバックにつくというのは、それだけで絶大な効果を発揮する。
「そう、あの騒動以来、蟲達は王女の元で大人しくしていたのだけど……また〝過激派〟とも言える一部の蟲達が群れをなして暴れているらしいわ」
「しかし、そんなことをリグルが許すわけがないと思うのですが……」
「本来ならば、蟲の王女が抑止力となり、それを未然に防いでいたでしょう」
　そこで一度言葉を切り、紫は静かに眼を閉じる。
　そして、静かに告げた。
「その〝過激派〟を率いているのは、リグル・ナイトバグ。蟲の王女本人よ」
「なっ……!?」
「貴女への命は単純よ。今回の騒動の原因である蟲の王女、リグル・ナイトバグに接触し、それを説得して止めさせること。もしも、説得に応じなかった場合、もしくは抵抗された場合は攻撃も許可するわ」
　攻撃も許可する、ということは。つまり、そういう場面になるかもしれないという可能性があるということなのだろう。場合によっては、力による制圧も考えなくてはならない。その事が、藍の心を曇らせる。
　そんな藍に、追い討ちをかけるかのように、紫はもう一言付け加えた。
「最悪の場合――――殺すことも、視野に入れるように」
　その言葉に、藍の背筋を寒気が一気に走り抜けた。
　それはつまり、殺してでも今回の件について解決してこいという、主からの絶対的な命

令。それを今、命令されたのだ。八雲の式として、必ず果たさねばならない。
　目を瞑り、呼吸を整える。これから先は、八雲の式であらねばならない。ただ冷静に、冷酷に。命令を実行するのだ。それが、式というものなのである。
　目を開け、ただ一言。
「……了解しました」
　八雲藍ではなく、八雲の式として。覚悟を、決めた。
「あぁ、そうそう。今回の件には、橙を同行させなさい」
「橙を……ですか？」
「えぇ。良い経験になるでしょう」
　橙は、確かリグルの友人である。その友人を最悪の場合、殺す可能性もあるというのに連れて行けというのは、不可解である。もしかしたら、橙がそれを阻止する可能性も考えられる。
　だが、それでも連れて行けというからには、紫には何か目的があるのだろう。八雲の式の一員として、こういった事態にも対応する事があるという経験をさせる為かもしれない。
「分かりました。では、早速準備にかかります」
「えぇ、よろしくね」
　紫の真意は分からないが、それでも自分は言われたことをやるまでである。
　立ち上がり、一礼をして部屋を出る。八雲の式として行くからには、橙の式を付け直す必要がある。橙は恐らく自分の部屋だろう。藍はそちらへと足を向けた。

　藍が立ち去った部屋の中。紫はじっと、虚空を見つめていた。
　この大妖怪が何を考えているのか。それを推測することは、きっと誰にも出来ないだろう。
　薄く笑むと、紫は立ち上がった。そして、目の前に『スキマ』と呼ばれる次元の断裂を発生させる。
「さぁ、果たしてどういう結末になるのかしら。願わくば、幸せな結末を……」
　そのままスキマの中へ体を滑り込ませる。その言葉は、誰に向けたものなのか。
「……ウフフ、なんてね？」
　最後の呟きを部屋に残して、八雲紫はスキマの中へ消えたのだった。

黒い暴走

著者：夏樹　真

「……これは、なんということだ」
　慧音は、眼前の光景に愕然とする。
　大きく成長しているはずの稲が食い尽くされた水田、そしてまるで台風でも通り過ぎたかのように荒れ果てた家々。それは例えるならば、大きな争いがあった跡地のようにも見える。
　昨夜、この小さな農村は突然〝黒い何か〟に襲われたと聞いて駆けつけてきた。その黒い何かの正体は、昨夜の時点では不明だったのだが、今でははっきりと断言できる。
　壊れた家の近くに、所々落ちているもの。
　それは、蟲の死骸であった。
　数はそこまで多くは無いものの、大小様々の蟲が死んでいた。無事だった者からの情報でも、蟲の大群が襲ったという証言が得られていた。昨晩は満月であったため、その姿を確認できたのであろう。
　この件で負傷者こそ出たものの、死者がいなかったのは不幸中の幸いであったといえる。
　今回の最大の問題なのが……
「それは、本当なのか……私には、信じられない！」
「慧音様……お気持ちは分かります。ですが、私を含め複数のものが聞いているのです。間違いとは思われませぬ」
　ここで襲撃を受けた者の中の多くが、その蟲の群れの中に人影があったのを確認していた。そしてその人影は、こう名乗ったという。

――――蟲の王女、リグル・ナイトバグ、と。

　慧音と共に人と蟲の未来を語り合った少女が、今回の事件の犯人だというのだ。
「そんな筈が無い……あるわけ無いんだ……」
　これが一人が聞いただけならまだ聞き間違えという可能性もある。だが、人数が多すぎた。まるで、自分の存在を誇張しているかのように。
　あまりにも、信じたくない話だ。だが、目の前に広がるものは現実である。そこから目を背けるわけには、いかない。
「おーおー、なんだか派手なことになってるな。何か事件でもあったのか？」
　その場の雰囲気に合わない、元気な声が空から降り注ぐ。
　慧音が下に向いていた視線を上げたのと同時に、その人物は目の前に降り立った。
「……魔理沙か」
「おいおい、なんか辛気臭い顔してるじゃないか。らしくないぜ？」
　霧雨魔理沙は笑顔で慧音の肩を叩く。それは彼女なりの元気付けなのだろうか。慧音はそう受け取ることにする。
　魔理沙は周りを見回すと「まるで幽香が暴れた後みたいだな。あいつは元気がありすぎて困りものだぜ」などと言っていた。的確な例えだな、と慧音の顔に少し笑みが戻った。
「ま、そんな冗談は置いといてだ。見かけてしまったからには気になるしな、話を聞かせてもらえないか？」
「あぁ、そうだな……」
　そして慧音は魔理沙に事のあらましを伝えた。
　話を聞いていくうちに、魔理沙の顔に驚きが生じていく。リグルと面識があるのだろ、やはり信じられないといった感じだ。
「あいつに限ってそんなことはないと思いたいが……証言の数が多すぎるぜ」
「そうなんだ。これだけの証言があると、流石にそう思うしかなくてな……」
　二人の間を沈黙が流れる。慧音はこれからどう対処しようかと悩んでいた。ここの復興を支援しないといけないというのもあるのだが、リグルを見つけて真相を問いたいという気持ちもあった。
　悩んでいた慧音だったが、魔理沙は早々に結論を出したようだった。
「つまるところ、ここで悩んでいたって始まらないって事だけは確かだな。だったらあいつを探しに行こうぜ！」
「しかし……いや、そうだな。ここで止まっているだけではダメか。また他の場所を襲われるという可能性もある以上、早くリグルを見つけるべきだろう」
「そういうことだぜ。もしかしたら偽者という可能性もあるしな」
　こうして二人の意見は揃った。慧音はここの責任者と少し会話をした後に、魔理沙と共に飛んで移動を開始した。

蟲の大群が移動しただろうと思われる不自然に出来た道を辿っていけば、やがていつかは追いつけるだろう。だが、その方角の先にあるものは。
「もしかして、蟲の大群どもは慧音とかの住んでいる人里を目指してるのか……？」
「この方角だと、間違いないだろうな……急ぐぞ、魔理沙！」
「幻想郷の人間最速によく言えたものだぜ。そっちこそ遅れるなよ、慧音！」
　こうして慧音と魔理沙の追跡が始まった。

　藍と橙は空を飛びながら移動していた。八雲一家の隠れ家のある『マヨイガ』を出てから、ここまでお互いに口数は少なかった。橙には、場合によってはリグルの命を奪うかもしれないという事は伝えてある。隠していたところで意味はないだろうし、もしかしたら感情的になった橙に妨害される危険性もあった。
　藍自身も、最終的にどういう結末になるのかは現時点では予想もつかなかった。出来ることならば、穏便に済ませたいところではあるのだが、全ては向こうの態度次第である。
「……あの、藍様」
「ん、どうした？」
　藍の後ろについて飛んでいた橙が、藍の横に並び話しかけてくる。
「きっと、何かの間違いですよね……あのリグルが、そんな事をするなんて……」
「橙、気持ちは分かるが……これは事実だ。リグルが、人の住む場所を襲撃したという情報に間違いない。それはちゃんと現実として受け止めるんだ」
「はい……」
　返事はするものの、橙の顔には暗い影が降りていた。
　仕方が無いか、と藍は思う。自身の友人が、予想もしてなかったような事態を起こしている。しかも、それを自分達で止めないといけない、最悪の場合は命を奪ってでも。
　まだ妖怪として、式として、幼さが残る橙には過酷な命令だろう。だが、それらを乗り越えてこそ八雲の式として成長していけるのだ、と藍は思っている。これは紫に与えられた命令であると同時に、橙への試練でもあるのだろう。
「まぁ、そんなに暗い顔をするな。私たちがリグルを説得して、考えを改めさせれば全ては丸く収まるのだ。その為にも、橙にも頑張ってもらわないといけないからな」
「はい、そうですね……私、頑張ります。絶対にリグルを助けてみせます！」
　藍の言葉に元気付けられたのか、頼もしい返事と共に橙に笑顔が戻ってくる。
　そう、橙はそれでいいのだ。いざとなれば、私が汚れ役を引き受ければいい。橙には、リグルを助けるのを頑張ってもらえれば、それでいい。
　そんな橙に向けて、藍も笑顔を返した。
　願わくば、この笑顔のまま終わりを迎えてくれればいいのだが。
　そうこうしているうちに、二人は目標を捕らえていた。
　木々が適当な感覚で生えている、森というよりは林に近いような場所に、その群れはいた。本来、緑色で鮮やかであろうその場所には、まるで黒い絨毯を敷いたかのように蟲の群れが蠢いている。
「む、あれは……」
「チルノ、それにみんなも!?」
　その蟲の群れたちの行く手を阻むように、チルノを筆頭としてルーミア、ミスティア、大妖精が立ちはだかっていた。弾幕で足を止めようと威嚇をしているようだったが、それは蟲達を少しだけ怯ませる程度の効果しかないようだった。
　そんな抵抗をするチルノ達を嘲笑うかのように、蟲達は速度を落とすことなく前へと進んで行く。
　一体、どれくらいその抵抗を続けていたのだろうか。チルノたちは遠目にも分かるくらいに、疲弊していた。所々服は破れていて、中には血が滲んでいる者もいる。
「チィッ、そんな抵抗では足止めにもならないのが分からないのか！」
　叫びと共に、チルノと蟲達の間に降り立つ。少しだけ遅れて、橙もやってくる。

突然の乱入者に、蟲達は動きを止めた。そして警戒するように、キチキチキチと音を鳴らし始める。
「あ、あんたは……！」
「お前達が何をしたいのかは知らないが、今の凶暴化した蟲達に」
「誰だっけ？」
チルノは藍を指差しながら、首をかしげている。どうやら本気で分かってないらしい。リグルの件でちょっと前に会ったというのに。名前は覚えていないにしても、せめて姿くらいは覚えていて欲しい。
橙がこっそりと近づいて、耳打ちしている。それを聞いて、チルノもあぁそういえばーと言い出す。うん、泣いてなんかないぞ。泣いてなんか。
ゴホン、と大きく堰をして場の空気を改める。
「と、とにかく。お前達ではコイツの相手は荷が重い。そうだろう、リグル・ナイトバグ」
藍は鋭い視線で、蟲達を睨みつける。その気迫は凄まじいものであったのだが、蟲達に動揺するような素振りは見られなかった。威嚇は、無意味らしい。
「……あはは、そうだね。チルノたちじゃ私は止められないよ」
蟲の中から聞こえてきた声。
蟲達の一部が盛り上がり、無数の蟲の中から、リグルが上半身だけの姿を見せた。
その目は、いつものオドオドしているような気弱な感じは無かった。自信に満ち溢れた、むしろ自分に酔っているかのような、そんな不自然な目だった。
その姿に、藍以外のみんなの動きが止まった。自分の知っているリグルの姿とは違うことに、少なからずショックを受けたようだ。友人が突然変わってしまったら、確かに驚くだろう。
その反応すら楽しむかのように、リグルは口元へと笑みを浮かべた。
「それで八雲藍さん、でしたっけ。何のご用ですか？」
「フン。我が主の命により、お前を止めに来た。多くは語らないぞ、大人しく蟲達を解散させるんだ。さもなくば……」
藍は姿勢を落とし、前で組んでいた腕を放す。いつでも飛びかかれる姿勢だ。
その体制を見て、リグルも意図を理解する。だが、それでもリグルの表情には余裕があった。
「止めなれば、戦うと。それもいいですね、最強といわれる妖怪の式を倒せば、私たち蟲の評価も上がるというものですよ」
「貴様……ッ」
リグルの挑発に、藍の頭がカッと熱くなる。
自身を馬鹿にされるのは構わないが、八雲を馬鹿にするような発言を許すことは出来ない。八雲の式としての誇りを汚されることは、藍には耐え難いことだった。
飛び掛りそうになる藍の前に、橙が飛び出して両手を広げる。その姿を見て、苦虫を潰したような表情になる。
橙はまだ、リグルの説得を諦めてはいなかったようだ。仲間たちがボロボロにされ、藍を挑発するような相手を、まだ信じているみたいだった。
「リグル、やめようよ、なんでこんなことしてるのよ！」
「簡単なことだよ、橙。私は蟲達の要望を聞いて行動を起こしているだけ。蟲達の地位が低いのは、弱いって思われてるからでしょ。なら、その実力を見せ付ければ、それだけ私たちの価値は上がるの。それは素敵なことじゃない？」
「分からないよ……リグルはそんなこと考えるような子じゃないよ！」
リグルの言葉が、どうやら今回の暴走の真意みたいだった。
蟲達の地位向上。それは確かにリグルが目指していたもののはずだ。
だが、しかし。リグルは、それを力で達しようとするような少女ではなかったはずだ。橙にはそれが信じられないのだろう。藍にも橙の気持ちは分かるつもりだ。
「……うるさい。うるさいんだよ。橙に一体何が分かるって言うんだ⁉」
今までの余裕を見せていた表情から一転、リグルは突然怒りの表情へと変わった。
突然の事態に、橙はビクッとなり後ずさり

をしてしまう。
「私達は、何もしていない。私達はいつでも自然と一緒に生きていた。それだけで満足だったんだ。でも、それを崩すのは一体なんだと思う。人間であり、妖怪だ。つまり他の生き物がいつでも私達を苦しめるんだ。それでも仕方ないと思っていたけど、蟲の中には我慢の限界に来ているのもいたんだよ。特に人間には苦しめられてきた。だから……私は、私達は。実力を示して、二度と苦しめられないように生きるんだ！」
　そう叫ぶと同時に、リグルは片手を上げる。
　すると、黒く密集している蟲達の一部が盛り上がり、鍵爪のような形状になった。
　それはさながら、獲物を捕らえる触手の如く。リグルが手を振り下ろすのと同時に、橙目掛けて一直線に襲い掛かる。
　その一撃に、橙はただ目を見開くばかり。驚きが勝り、避けるという本能も働いていないようだった。
　藍は駆け出して橙を守るように片手で抱える。そして飛ばされてきた鍵爪に対して弾を放ち、軌道を逸らす。
　ズガァンという大きな音と共に、藍と橙のいるすぐ側へと鍵爪はめり込んだ。
　二人の周囲に、土煙が立ち込める。
「……いいだろう。リグル・ナイトバグよ。貴様の意思は聞き届けた。」
　ゆらりと立ち上がり、藍は宣言する。
「八雲の命に従い……貴様を殺す。覚悟するがいい」
　静かに響くその声は、しかしはっきりとした殺意を込めていた。
　周囲に緊張した空気が生まれる。例えるならば、嵐の前の静けさとでもいったところだろうか。
「チルノ達は下がっていろ。巻き込まない自信はないぞ」
「う、うん……」
　リグルを睨む目はそのままに、チルノ達を下がらせる。
　さきほどのリグルの攻撃を見て、手加減が出来るような相手ではないと判断した。蟲達を瞬時に操り、鍵爪のような形にして意のままに攻撃するというのは、中々厄介だ。相手は無数の蟲達の集合体である。やろうと思えば、きっと何本も生やすことが可能だろう。
「橙、行くぞ。あいつはお前の知っているリグルではない。我々の敵だ」
「で、でも……私には出来ません……」
「……仕方ない、か」
　リグルを警戒しつつ、藍は橙の元へと移動する。
　余裕を見せ付けるかのように、リグルはそれを黙って見逃してくれるようだった。舐められたものだなと、心で愚痴る。
「いいかい、橙。聞いて欲しいんだ」
「ぇ……？」
「私を恨んでくれていい。嫌ってくれたって構わない。だがそれでも、私達は紫様の命を実行しないといけないんだ。八雲の名を冠するからには、失敗は許されない。その為になら、私は非道にもなれる。だから、橙。先に謝っておくよ。許してくれとは言えないが、それでも……ゴメンな」
　藍の言葉の意味を、橙は理解できなかった。ただキョトンとするだけだ。
　そんな橙を見て、藍は胸の中に沸いた罪悪感を、頭を振ることで無理やり払う。そしてただ静かに一言だけ、何かをぼそっと呟く。
　その瞬間、体に電気が走ったかのように橙はビクッと震えた。どこか虚ろな目でそのまま立ち上がると、リグルの方を向いて戦いの構えを見せた。
　式とは本来、主のために使役される存在である。仮に式が主の命に背いたときのために、その意思を拘束し、意のままに操る方法というものがある。藍は、それを橙に施したのであった。
　本当ならば、このような手段は取りたくは無かった。紫の命でなければ、絶対に使うことなど無かったはずだ。純粋に、紫の命が橙よりも比重が重かっただけである。
「さぁ、覚悟はいいか。蟲の王女よ」
「私はいつでも構わないよ。一人が二人になったところで、私の勝利に変わりはないからね」
　言葉を発すると同時に、リグルは鍵爪を二つほど発生させ、二人目掛けて打ち込む。

それが開戦の合図となり、藍と橙は左右別々の方向へと跳ねるように飛び出した。誰もいなくなった地面に、派手に鍵爪が刺さった。

　藍と橙で挟み込むような形にし、二人は一斉に弾を発射する。小手調べのつもりで放ったその攻撃は、蟲達が体を張って作り出した障壁によって阻まれる。何かの力が作用しているのか、弾は当たる瞬間に弾けて消えてしまったようだ。

　お返しといわんばかりに、リグルはまたしても鍵爪を作り出し反撃してくる。それらの直線的な攻撃を回避しつつ、藍は攻め手を考える。

　今のリグルは、言ってみれば四方へ攻撃できる鉄壁な要塞のようなものといえるだろう。無数の蟲達を使役し、いくらでも鍵爪を作って攻撃を繰り出してくる。こちらが攻撃をすれば、蟲達を防壁として使役しその攻撃を防いでくる。実に厄介な相手である。が、それでも藍には勝算があった。

　いくら相手がどこにでも攻撃できるとはいえ、それを考えるのはリグル一人である。二手に別れ、かく乱するように攻撃を繰り返していけば、いずれは隙が生まれるだろう。今は、それを待つしかない。

　何度目かの攻撃を避け、そして何度目かの攻撃を加える。だが、やはり効果は無し。完全にこう着状態になってしまっていた。

「ふん、思ったよりはやるな……」

「生半可な覚悟ではないということですよ。でも、そろそろ終わりにさせます……！」

　リグルの周囲に、黒いうねりとなった蟲達が集合する。それらはさながら、荒れ狂う海原の様に。ギチギチギチと響く不気味な音が、獲物を飲み干すのを今かと待ちに待っているようにも見えた。

　そして蟲の王女は高らかに、そのスペルカードを宣言する。

「蟲符『ナイトバグ・フラッド』！」

　その声と共に、リグルを守るように展開していた蟲達は濁流となって一斉に藍と橙に襲い掛かった。

　素早く移動し、その流れから逃れる二人。側にあった木が、盛大な音を立ててなぎ倒される。こんなものに飲み込まれれば、いくら藍とはいえ無事ではすまないだろう。改めて、今のリグルの実力を思い知らされる。

　だが、この攻撃によってリグル周辺の蟲の数は減っていた。そこが、穴となる。

　藍は意識を集中させ、橙へと指令を飛ばす。とあるスペルを使わせるために。

「鬼神『飛翔毘沙門天』！」

　スペルカードを宣言し、橙は膝を抱える姿勢になるとそのまま高速で回転を始める。そのまま弾幕で蟲の波をけん制しつつ、リグルへと向かっていく。

　防御を攻撃に回している以上、高速でそれを止める術は残されていないように見える。だが、それを目前にしてもリグルは身動きをとらない。むしろ、余裕の表情だった。

「攻撃は最大の防御、簡単に近づけさせたりはしない！」

　リグルを目指していた橙の前に、黒いうねりが突然現れる。その事態に、藍は舌打ちをすると自身の後ろをちらっと横目で見る。気づけば、自身を追いかけていたうねりの量が減っている。どうやら、ここにいた蟲達の一部をあちらへと向けたようだった。

　橙を緊急回避させ、少し距離を置かせる。その後ろを、蟲のうねりは追跡していく。

（攻撃のスペルだと思っていたが、攻守に威力を発揮するスペルとは。実に面倒だな）

　黒い濁流を自在に操るスペル。その濁流に飲まれないように動き続けながら、藍は頭の中で計算式を組み立てていく。こんなところでの敗北は許されないのだ。

　そして、藍はもう一度橙へと命じる。橙は回転したまま、再びリグルへと向かって突撃していく。

「何度したところで、無駄ですよ！」

　またしても蟲の濁流に阻まれ、橙は進路の変更を余儀なくされる。

　だが、それこそが藍の狙いでもあった。橙に意識が集中している隙を突き、藍もスペルカードを宣言する。

「式神『憑依荼吉尼天』！」

　橙と同じように、藍も膝を抱える姿勢で回転を始める。ただし、その回転の速さは橙よりも上である。それ故に、スピードも橙より

上である。
　隙を突いての一点突破。単純にして明快な作戦だった。
　橙に気を取られ、蟲達はそちらに割かれている。藍は目標を目掛け、高速回転で迫っていく。
「あはは、浅はかですよ……それくらい見通してます！」
　リグルは藍を見据え、蟲達のうねりを操る。
　藍の速度と、蟲達の速度。比較して、ギリギリ防御は間に合うはずだ。このうねりは全てを喰らい尽くす死のうねりである。その鉄壁の守りがある限り、リグルは安全なのだ。
　そう、思っていた。しかしそれこそが、リグルの隙なのだ。
　藍はわずかに口元をニヤリと歪ませ、そして更に加速する。リグルの表情に驚きが生まれるのに、時間はかからなかった。
「な、まさかこのまま突っ込んでくるつもりなの、そんな馬鹿な!?」
　迷いなく、藍は蟲のうねりへと突撃する。盛大な音と共に、藍の体中に無数の蟲達が喰らいついてくる。全身の痛みに藍の顔は苦痛が浮かぶ。だが、その程度の痛みに負けるほどの覚悟でこの中に飛び込んだわけではない。
　蟲のうねりを藍は突き抜ける。回転を止め、眼前の敵を睨みつける。
　距離にして、およそ十数メートル。驚愕の表情を浮かべている敵は、恐怖からか体の動きが硬い。
「大した実力だったよ。正直なところ、貴様がこれだけの強さだとは思っていなかった。舐めていたことは謝ろう。我が敵として、貴様を葬る……！」
　右手を大きく突き出し、そこからクナイ型の弾を発生させる。
　力を込められた一撃は、正確にリグルを捕らえている。
　その一撃は、迷うことなくリグルの心臓を、狙っていた。

　すっかり夏の様相に包まれた博霊神社。その境内で一人、だらだらと掃除をしている巫女がいた。
　額に汗を浮かばせながら、博霊霊夢は盛大にため息をついた。夏場の掃除ほど、面倒なものはないと霊夢は思う。なんでこんな暑い中を、綺麗にしないといけないのだろうか。大した客も来ないというのに。しかしそれが巫女の仕事である以上は、サボるわけにはいかなかった。
「あらあら、暑い中ご苦労ね」
　ほらでた。大したことない客が。
「あー、賽銭箱はあっちよ。たまには入れていきなさい。何かいい事が起こるはずよ」
「ごめんなさいね、運頼みは好きじゃないのよ」
　じとーっと、横目で大したことない客、八雲紫を睨みつける。その視線を受けても何事もないように涼しい顔で、微笑を浮かべている。日傘を差しているとはいえ、顔に汗が浮かんでいないことに対して何か理不尽なものを感じずにはいられない。
「んで、何の用よ。今は掃除中だからお茶は出せないわよ」
「気にしないわ。暇つぶしに寄っただけだしね」
　どこまでも胡散臭い紫の相手など、出来ればしたくはない。が、向こうはどうやっても帰らないと思うので適当にあしらうことにする。
「そういえば、霊夢は『蟲の異変』には気づいているのかしら？」
「蟲の、ねぇ。まぁ魔理沙も言ってたけど、今年は蟲の力が強くなっているみたいねぇ。異変と呼べるほどのことじゃないと思うから、無視してるけど」
　やっぱりねぇ、という笑い声。自然界での異変が大きな異変につながるというケースは可能性としてありえる話ではあるのだが、今回に関しては特に手を出す気はなかった。
　霊夢が手を出さずとも、いずれ沈静化するだろうと見込んでいた。そう思ったのには、理由もある。
「だって、あんたが動いているんでしょ？」
「あら、霊夢にはバレないように動いていた

つもりなのだけど」
「巫女の勘よ。そうじゃなきゃ、動かない私に叱咤しにくるでしょ」
　紫は、何かと異変があると霊夢を動かそうとする傾向がある。
　その面倒を持ち込む人物が、これだけの期間何も言ってこないということは、緒戦はその程度の小さな異変ということか、もしくは自分で解決に乗り出しているかのどちらかなのである。
　そう考えたからこそ、霊夢も何の気兼ねもなくのんびりとしていたという訳である。
「……ふふ、嬉しい推測ね。ちょっとやる気が出ちゃったわ」
「それならさっさと行きなさいよ。こんな所にいないでさ」
「それがそうもいかないのよねぇ。まだ私の出番じゃないのよ。家で一人でゴロゴロしているのも退屈だし、幽々子は妖夢とどこかに出かけているみたいだし。霊夢のところしかなかったのよ」
「はいはい……ま、邪魔だけはしないでね」
　ニコニコと笑顔の紫を尻目に、霊夢は掃除を再開する。
　ぼうっとする頭で、今日の晩御飯は何にしようかなぁなどと暢気なことを考える。霊夢の頭には、蟲の異変のことは全然頭に入っていないようだった。
　それは、異変の規模が大したことはないだろうという予測からか。
　それとも、八雲紫への信頼からか。
　その答えは、霊夢本人にしかわからなかった。

（終）

〈作者コメント〉
　夏樹です。今回はついにバトルシーンとか書いてしまいましたよ。初めてなので全然うまく書けた気がしないのが悔しいところ……！　時間がなかったために全体的に書きたかったのを削除したりしててちょっと心残りがありますので、いつかリベンジしたいですよー。なんか毎回同じようなこと書いてますね！

蟲の願事　～二話～

著者：社 蛍夜

　チルノ達がリグルの寝室に着いてから約二分。チルノ、ミスティア、ルーミアは一分過ぎた頃には動けたが、腰の抜けた大妖精はまだ動けなかった。
　そのまま廊下にいるのもいい感じがしなかったのか、チルノ達は大妖精を運び、朝のようにリグルを囲む形になった。違うところは大妖精が横になってる事だろうか。
　そして、リグルが何気なく聞いてみた。
「で、そんなに慌ててどうしたの？」
　だが、その言葉に固まる四人。
　さすがに返事が無い事に驚き、オロオロとするリグル。『何か悪いことでも言ったのか』等を考えているようだ。
　しかし四人は『勘違いで飛び込んだ』だなんて恥ずかしくて言えない、と思ってるようだ。考えたら恥ずかしくなったのか、顔が赤い。
　悪い事をし、謝罪するかのように見るリグル。さすがに表情に出てるのが分かってるのか、顔を見られないようにする四人。誰も喋らぬまま、沈黙が流れる。
　そんな沈黙を破ったのはミスティアだった。
「リグル！」
「ぁえ!?　あ、どうしたの？　みすちー」
　突然の声に不意を突かれ驚くリグル。
「さ、さっき起きたばかりなんだよね？」
「あ、うん。皆が来る少し前に起きたばかりだったからね」
「そう」
　ホッとして胸を撫でおろすミスティア。他の三人も安心したようだ。
　それを見たリグルは、『心配して飛び込んできたのかな』と、思った。そうしたら、考えてないのに言葉が出てきていた。
「みんな、ありがとう」
「ふえ!?　な、急にどうしたの!?」
「あ、ううん、ちょっと言いたくなっただけ」
　微笑むリグル。その顔にドギマギとするミスティア、ちょっと顔が赤くも見える。チルノも似てる、いや同じ状態だ。
　大妖精とその看病をしていたルーミアの二人は、見ていなかったようだ。
「ん？　どうしたの？　二人とも」
「っな、なんでもないわよ！」
「あ、あたいだってなんでもないわよ！」
　首を傾げるリグル。今の二人の大きな声にに振り向いたルーミアも何があったのか、という表情だ。
　威嚇したりする二人。
　その後はいつものようにふざけて、楽しんで、笑って、あっという間に時間が過ぎて行った。
　そして夜になり、
「それじゃ、また明日ね」
　ミスティアが
「これなら明日には元気になってそうね」
　大妖精が

「そーなのだ！」
ルーミアが
「それじゃぁ、ちゃんと寝てるのよ」
チルノが、帰ろうとしていた。
そして、リグルは見送るため、玄関に来ていた。
「分かってるよ。皆を見送ったらすぐ布団に戻るよ」
「よし。それじゃ、あたい達はこれで」
「うん。また明日」
そう言うと、チルノ達は帰路へと着く。
リグルは見えなくなるまで四人を見送った。
そして、リグルは振り返り家の中へと戻ろうとする。
「こんばんわ」
「ッ⁉」
不意の声に驚き振り返る。視線を向けると後ろに誰かが立っていた。
全身マントに身を隠し、顔も目深なフードなため分からない、が少なくとも聞いたことのない声だった。
『聞いたことがない・・・？』
本当にそうなのか、と考えた途端頭痛に見舞われた。頭を両手で抱えるリグル。苦しむリグルを見て怪しい〃誰か〃は喋る。
「あぁ、昨日の事は忘れてたんだったね」
その言葉に驚き、顔を上げるリグル。が、目の前には鈴があった。
「悪いけど、また寝てもらうね」
そう言うと鈴を鳴らす。リグルはその音を聞いた途端、視界がぐるんと回る。そして
「おやすみ、女王様」
リグルは倒れた。

※※※

チルノ達は喋りながら歩いていた。
一番後ろを歩いてた大妖精が、会話に参加していなかったからなのか、不意に後ろの方から音が聞こえた。
森の中ではあまり聞きなれない音だからか、はっきりと聞こえた。鈴の音が。
「ねぇ」
「お、どうしたの？　大ちゃん」
話を止めて、振り返るチルノ達。
「なんか音が聞こえなかった？」
「ん、そういえば」
「あまり聞かない音だったね、あれは・・・」
「鈴、だね」
大妖精が何の音か答える。と、その音に何か引っかかりを感じるチルノ。
「鈴？」
「あぁ、そういえばそうね。この辺だと神社とかでしか見ないから忘れてたわ」
「うん、私もはっきり聞こえなければ分からなかったかも」
「にしても何で鈴？」
「さぁ」
そう言うと考え始めたミスティアと大妖精、横ではチルノとルーミアも考えている。
すると、何が思いついたのか突然声を上げるチルノ。
「あー！　分かったわ‼」
「ぅえっ⁉　突然叫ばないでよ」
「ま、また腰が抜けるかと」
大妖精を心配するルーミア、軽く肩を支える。
「で、何が分かったの？」
「昼間の変な奴を追いかけてた時に聞こえてたのと同じ音だわ！」
「・・・え？」
するとその言葉を聞いた途端、ミスティアが必死の形相でこう返した。
「馬鹿！」
「んなっ！　馬鹿って・・・」
言いきる前にさらに付け足す。
「それってリグルの所にソイツがいるって事じゃない‼」
流石のチルノも気付いたのかハッとなる。
「え、てことはリグルちゃんは・・・」
その言葉を遮り、チルノは今やるべき事を叫んだ。
「行くよ‼」
（終）

〈作者コメント〉
こんばんわ。配布する時間が夜だと思うのでこの挨拶です。
さて、今回までのss短いですね。次回から、

も少し長くしようかと思います。
　まぁ、読者の声が聞けないのが難点ですね。コレ。読者置いてけぼりになってないか心配になってきましたよ。
では、次回から二倍を目指したい・・・です。できるといいな。

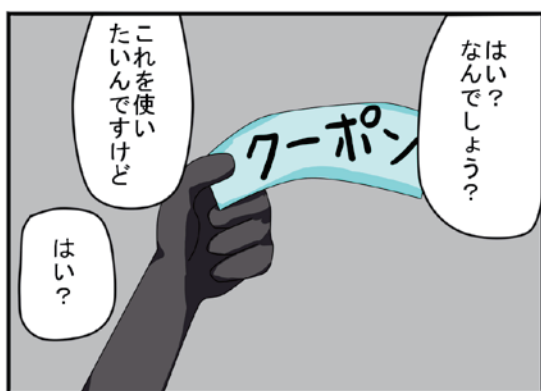
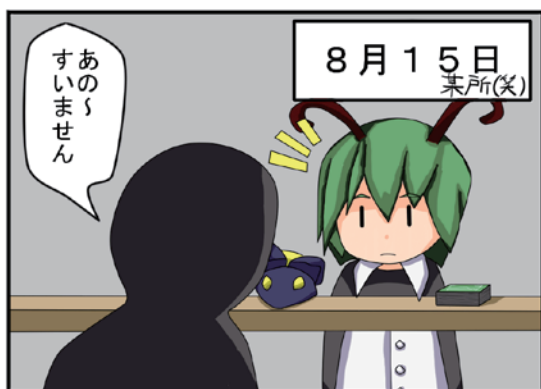
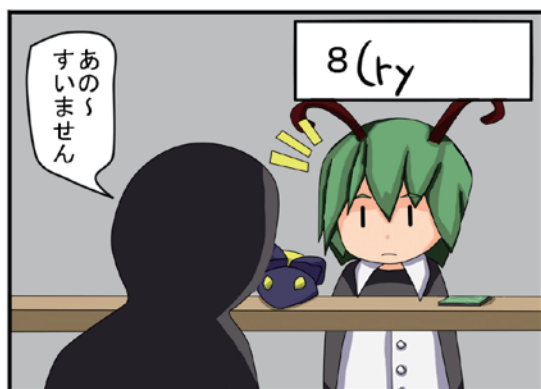
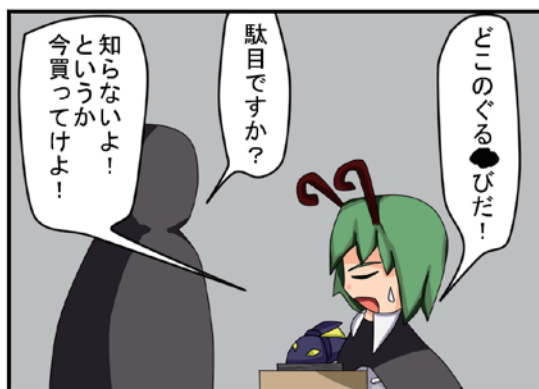
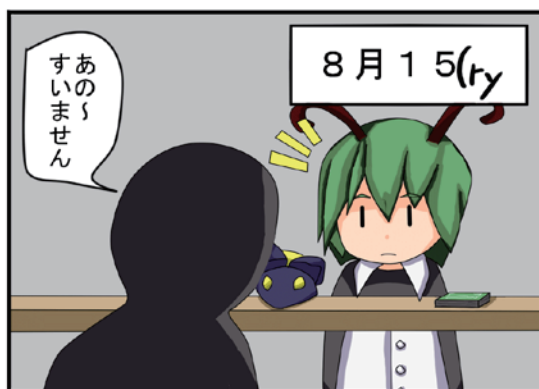
追記
　掲示板へアンケート設置させてもらおうと思います。『これ、毎月読んでるよ〜』な方、答えてもらえると作者が狂喜します。

コミケの季節

猫いたひと：悠羅悪

リ●ルートから

りぐるなび

重力

※兎角、サークル様への迷惑となる行為はやめましょうｗ

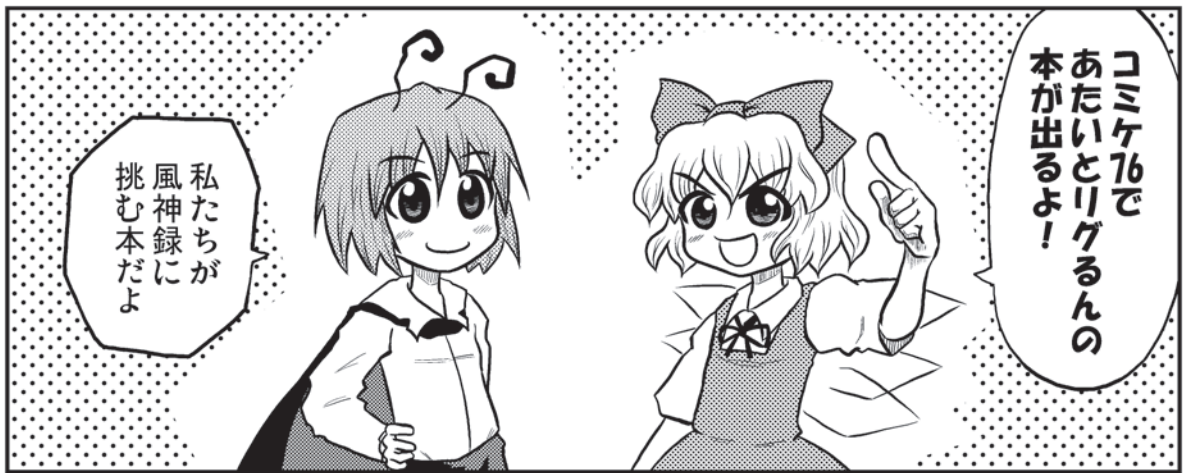
最初は私もリグルきゅん派でしたが今

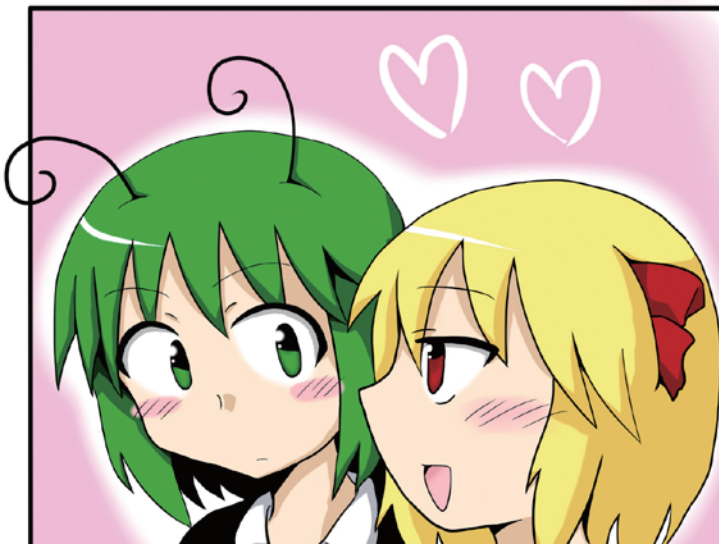
何だこりゃ…

夏休みの自由研究
題：萃香!!

楽屋ウラ的何か。

草加あおい

こんな敵たちを
無敵のあたいが
蹴散らして
最終的には
神すら倒すのよ！
こいつらの中にも
神いるけど
秋 静葉(姉) 穣子(妹)
冬が来ると暗くなる
それはそうと椛
あの緑の悪魔に
近づいちゃダメよ
あの股間の邪悪な
緑キノコに貫かれると
1UPしちゃうからね
(妊娠的な意味で)
奴が来る。
あれ？ この時期に
4面の主線までしか
できてないって
ヤバくない？

リグル×ルーミア合同企画
りぐるみゃ！
リグるみゃ合同誌
告知
東&毒粗
東方project FanBook

リグるみゃ合同誌告知漫画　　東

月刊ナイトバグの主役、リグルと、ルーミアのカップリング合同誌
その名も「りぐるみゃ！」コミックマーケット７６にて頒布します
総ページ数　９６ページ
価格　８００円（予価
参加人数　２３人
頒布スペース
8月15日（土）東地区・E－01a M×M-Factoryさん
8月15日（土）東地区・K－２４a 盆栽さん
先着順でおまけの缶バッチもあります
詳しくは告知ページを見てね→http://rigrumya.make-miracle.jp/

主催　東　（海亀）
毒粗（鯖味粗伍膳）

無題

草加あおい

p98～p99

世間様ではもう夏休みなのでしょうか。小学生に戻ってりぐるんと外で遊び倒せたらと妄想するようになりました。インドア派にもかかわらず。今回の作品はそんな想いの一部が漏れ出したようです。小さい頃から虫はニガテですが、りぐるんと一緒なら虫と戯れるのもきっと楽しいことでしょう。
あ、あと、りぐるんは女の子だからねっ！？
でも、弟が欲しいと思っていた自分的には（ｒｙ

りぐるん！宣伝編

の一と

p100

リグチルに宣伝任せたはいいものの、あの子らおバカだから肝心のサークル名とスペース名を言い忘れやがった。
100ページで宣伝してる本は、2日目 K-49a「立入禁止の星空」で頒布されるので、どうぞよろしくです。

リグるみゃ合同誌告知

東&毒粗

p101～p103

もろ宣伝ですねサーセンw夏コミのリグるみゃ合同誌をよろしくおねがいします！

さようなら

夜行

p107

特になし

表紙

小崎

血管が細く、注射針の刺しにくさに定評のある私。
おっかしいなぁ？という表情で何度も針を入れ直す看護師さんにあたると、堪らない優越感を覚えます。
そゆ時大抵最後は手の甲に刺されちゃって、これが激痛！

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

今宵の虫は、お嬢ちゃんのトラウマになるよ。
緑

p2

ホラーといえば肝試し。肝試しといえば永夜抄EXステージ。静かなのが日本のホラーの特徴なのです。あ、甚平なのはきっと縁日の後とかだと思います。夏ですし。

無題
草加あおい

p50～p51

チルノ融解をはじめ、ベタなネタばかりでしたが、いかがでしたでしょうか？　私としては霊夢のイメージが『とりあえず妖怪を見たら倒す』だったり「略奪開始～」のセリフの印象が強すぎてかなり黒いです。霊夢好きの方、ごめんなさい。それにしても、何故霊夢は笑顔で迎えてくれたんですかね？　真相は闇の中なのかー。

ミドリノハネ
秋水

p4～p8

こんなとこにいてもいいのかな（そわそわ
謝りたい事は多いです。
一番の反省点はストーリーとセリフを先に考えなかったことですね。

Parasitoid
やにたま

p52

バイト関係でお蚕さんと触れ合った（?）ことが切欠でネタを思いついたの巻。それは締め切り前日の出来事だったそうな。（ぉ
しかしこの内容でテーマ投稿にあっているのでしょうか・・・
後ネタかぶっていそうな予感（汗
それ以前に５コマ目でオチが読めると言う…（大

蟲の手帖
HOUSE

p32～p38

残念なことに肝心の蟲の写真が撮れませんでしたので、心安らがない薄汚れた河川の映像を見て少々お待ち下さい。
…そのうちに分かりにくい本編を補完するオチ編だとか、取れなかった写真のフォローをサイトでやりたいです…。
web検索→【黄色い地球儀】

蠱毒
斑

p53～p56

妖怪にすら得体の知れない何かも、幻想郷にはたくさんありそうですよね。それはそれとして怯えているリグルは良いですね。

そして誰もいなくなるのか―
くらげん

p39～p41

子供の頃は昼ドラの愛憎劇がホラーにしか感じませんでした。

本当は怖い秘封倶楽部
羅外

p57

分かりづらいネタで済みません。

リグると！
ひどぅん

p49

人間が焼肉を食べるのに何のためらいも無いように、彼女達も人間を食べるのに何のためらいも無いのかもしれんね。

コミケの季節
怒羅悪

p96～p97

引き続き投稿のどらおです。場所の説明が抜けてましたが多分大丈夫でしょうｗ　リグルが何か頒布しに来ているようです。ちなみにワタシの友人は値引き交渉している人を見た事があるそうですが、本当にそんな人は居るんでしょうか・・・ｗ？　それでは、失礼しました。

月刊ナイトバグ　2009年8月号

2009年7月22日発行
企画・編集：神楽丼／小崎
http://www8.plala.or.jp/denpa/indexdon.html

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画　web配布／自由投稿参加型月刊誌

編集後記

最近は、雨、雨、暑、雨、暑、雨、暑、雨、暑、暑。という具合に、水攻めと火攻めのサンドイッチをたらふく喰う毎日。皆様お元気ですか。私は一足早く蒸し上がりました。もふぁー。

そんな日ごとにきつくなる暑さと、迫る夏祭り(コミケ)を前に、今月は投稿も減るかなと思ってたんですが、予想に反して充実した内容になりました。読み応えは今までの中でも特にあるほうではないかと。あと、投稿陣は、皆思った以上にホラー好きだ。

さて、次号のテーマは秋を先取りの『スポーツ』特集です。あっつういけどね。きっと脳がとろけるくらいあっつぅいー時期ですけどね。ということで、水分はこま目に取りつつ、流れる汗もそのままに走り抜ける作品をお待ちしてます。

あぁ、ぐらぐらする。蒸し上がった頭ではテンションが上がりきらないので短めに切り上げます。
コミケ参戦組の方に幸運を。それと適度な水分を。

梅酒に漬けてた梅って、これだけで結構きますね。

クエン酸推進波ー。

2009 / 7 / 22　小崎

次号9月号は8月22日（土）発行予定！

※次号投稿締切は8月15日(土)です。皆様からの熱い投稿をお待ちしています。

さようなら

夜行

さようなら
夏の幻想は終わりを告げる
さようなら
私はまた独りになる
地上に輝く七日目の焔、
世界で一番美しい場所
私は一人、命の合唱を聞く

「さようなら。」
今までお疲れ様
「さようなら。」
温もりをありがとう
「さようなら。」
寂しくなるね
「さようなら。」
ああ、きみで最後だよ
さようなら
さようなら
さようなら
また会おう
さようなら

夏の幻想は終わりを告げる
私はまた独りになる

リグル、リグラー、そしてリグリエーターの方々に愛を込めて。　夜行

月刊NIGHTBUG 2009年8月号

Touhou Project
Wriggle Nightbug
Fan book
Not for sale

豆板醤
蛍光流動
ADDA
モ誠幹
シャリア
てつ
涼音 奏
怒羅悪
草加あおい
ひどぅん
羅外
斑
くらげん
やにたま
HOUSE
KAGOKAGO
貴キ
熾天使
キッカ
草葉
言示弄
泥田んぼ
社 蛍夜
MAL
壁々
ハンダゴテ
はね～～
夏樹 真
夢宮
くろと
夜行

緑
秋水
東&毒粗
のーと
小崎